

早稲田大学本庄高等学院
2025年度 学校自己評価・関係者評価

2026.3.31
早稲田大学本庄高等学院

【注意】

以下の内容については、担当教員が該当項目について記載しているため、多くの箇所内容の重複する部分がある。

0. 巻頭言（学院長 半田亨）

学校とは元来保守的な場になりがちである。日常生活において大過がないことが望ましく、そのため変化が好まれない場所とされてきた。通常の授業と学校行事・部活動を事故なく、滞りなく行っていれば社会的批判は起こらない。現状改革を打ち出したり、新しいことを始めようとすると教員の仕事を増やしてしまう。このように、ともすれば事なかれ主義な職場になってしまう可能性がある。子供が多くて買い手市場であった過去にはそれでも良かったかもしれないが、少子化が進む現代、これでは学校間の競争に勝てなくなってしまう。

本庄高等学院はこの間、大学附属校という立場に胡坐をかかなく、学校改革に努めてきた。首都圏の学校に比べて交通の便にハンデがあるため、資質の高い受験生を集めるための入試改革・カリキュラム改革、それに加えて各種教育プログラムの工夫、生徒教職員・保護者にとって居心地の良い学校環境づくりなどである。

また、急速に進む AI 技術をその代表とする情報環境への対応力も教育現場で育成する必要性が生じている。本学院では、まずは AI 利用のガイドラインを早急に制定した。

以下の文章から、本学院の学校改革の取り組みへの意欲を感じとっていただければ幸いである。

1. 教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された 3 つの建学の理念、すなわち「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、2000 年に「21 世紀の教育研究グランドデザイン」を發表し、08 年には創立 125 周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティを目指すこととした。さらに、創立 150 周年を展望した「Waseda Vision 150」を 12 年 11 月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにし実行している。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立 100 周年を記念して 1982 年に男子校として開校した。2007 年に男女共学となり、2012 年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、「Waseda Vision 150」に関連し、2012 年 11 月、「本庄高等学院の将来構想」を發表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。

本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院の目的は、早稲田大学教旨、「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいた教育・研究活動を行なうことである。

る。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承された。

1. スクールポリシー

2025年より議論を重ね、1982年の開校依頼掲げてきた従来の教育基本方針を時代に合わせ発展的に進化させる形で2026年4月にスクールポリシーとして3つの方針を掲げた。

早稲田大学本庄高等学院スクール・ポリシー（3つの方針）

本学院は、早稲田大学教旨に基づき、以下のスクール・ポリシーを策定し、教育の基本方針とする。

グラデュエーション・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）

学院生が、早稲田大学で学問を追究し、他者と協働しながら社会に貢献する人物となるために、次の4つの資質・能力を育成する。

- (1) 「自ら学び、自ら問う」ことを基本とする、自律的な学習姿勢を確立する。
- (2) 時勢に流されない自主独立の気風と、困難に立ち向かう進取の精神を有する。
- (3) 論理的思考力、総合的な判断力、豊かな創造力・表現力を身につける。
- (4) みずみずしい感性と確かな倫理観をもち、社会を牽引するリーダーシップを備える。

カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）

グラデュエーション・ポリシーの実現に向け、次の4つの領域を柱とした教育活動を行う。

- (1) 自由と多様性を尊重する校風のもと、学院生活の基盤となる気力・体力・知力の調和を図る。
- (2) 本庄地域の歴史的資源や大久保山周辺の自然環境を活用し、学びのあり方を拡張する。
- (3) 教科の枠にとらわれない先進的・実践的な教育と、卒業論文を集大成とする探究活動を推進する。
- (4) 個々の特性を伸ばす多彩な選択科目を設置し、将来を見すえたキャリア形成を支援する。

アドミッション・ポリシー（入学者の受け入れに関する方針）

次の4つの素養を身につけている生徒が、全国各地・世界各国から広く入学することを期待する。

- (1) 早稲田大学および本学院で学ぶ強い意志がある。
- (2) 各科目の学習内容を有機的に結び付けており、それらをより深める意欲をもっている。
- (3) 社会に貢献する自身のあり方を展望し、生涯学び続ける喜びを享受したいと考えている。
- (4) 多様な人々が社会に集い支えあっていることを理解し、互いに認めあう寛容な態度を備えている。

3. 教育活動

3.1 授業

3.1.1 授業運営

（ア）国語

2025年度も多くの授業で音読や群読、発表を実施した。また、PC、iPad、書画カメラ等のデジタル機器を積極的に用いる一方、黒板を使った旧来の形態の授業も随時取り入れることで、柔軟な授業展開を行った。さらに、卒業論文や高大接続を意識し、レポートの書き方の実践的な指導も行った。他にも、1年生の授業では年間10冊を目標とした「読書の記録」への取り組みを継続して行った。

3年次選択授業においては、大学と同様のゼミ形式の授業を実施し、レジュメの作成や発表、学期末レポートの執筆などを進めたり、授業内容と関わる実践的な活動（例えば中国文化を取り上げたゼミでは中華料理の調理実習をするなど）も行った。

また、国語における生成 AI との向き合い方についても、生徒がしっかりとした意識を持てるよう指導に努めた。

(イ) 数学

2025 年度も一年生の春休み明け数学学力テスト・数学 I の一学期中間試験に対して追試・補講を実施した。また、昨年度同様、自学自習 LA の制度を導入し、専任教諭・非常勤講師に加えて大学生による質問対応の時間を設け、手厚いフォローを行なった。自学自習 LA は対面による形で実施し、多くの生徒の利用があった。

(ウ) 理科

引き続き安全管理・衛生管理に留意しつつ、取り組みを各科目で充実させた。講義だけでなく、ディスカッション、実験実習、それに伴うレポート作成の方法、添削を行い、発表による生徒のアウトプット技術の向上も図っている。生徒たちが能動的な学習をする環境が醸成されている。

(エ) 地歴公民

「自ら学び、自ら問う」という学習基本方針に従って、主体的・能動的な学びを促すことを重視する一方、附属校として、常に学部における学びとの結びつきを意識しながら授業を展開した。以下、歴史分野、地理分野、政治・経済分野、公共分野に分けて振り返る。

【歴史分野】

単に出来事の時系列や人物の暗記を求めるのではなく、現代という時代が、過去の長い歴史の展開の結果であることを意識させるよう心がけた。特に現在の動向に関連する歴史的事象についてはそれを強調し、受講生自らが「歴史を学ぶ意義」について考えることができるようになることを目指した。地図・人物・建築物等の写真をはじめとする視覚教材を積極的に用いることによって、受講生の想像力を掻き立て、歴史に対してより親しみを持たせるような工夫も行った。

【地理分野】

既存の高校地理の学習範囲にとらわれず、それまで学んできた他教科での学習内容を可能な限り援用しながら、身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて、地理的事象の因果関係を自分の文章で論理的に説明できる能力を養うことを目標とした。また、授業で得た知識が、自分自身の今後の生活における知恵として活かされるような授業を心がけている。

【政治・経済分野】

生徒によるグループワークやディスカッションを取り入れ、主体的・能動的に学ぶ機会を多く設ける努力をした。任意の国際問題について自ら論点を設定して全員で討議する授業を行ったり、現代社会の諸問題について映像資料を活用しながら探究する授業を行ったりした。時事問題を多く取り上げ、ニュースへの関心を高めるよう努めた。

【公共・倫理分野】

受講者に対して、哲学や正義論に関する高度な内容の文献を正確に読み込む訓練を通して、先人たちが世の中の様々なことがらについていかに骨身を削って真剣に考えてきたのかを知らしめるように努めた。そして、現代に生きるわれわれの務めは、それら先人たちの功績をまず謙虚に受けとめ、それらを参照しながら、最終的には自分の頭で「何がまともなのか」を考え抜くことであるのだということを語った。適宜、グループワークの方法も取り入れて、自分の意見を表明することと他者の意見に耳を傾けることの重要性についても気付かせるように努めた。

(オ) 英語

英語カリキュラムにおいてはすべての学年で、リスニング・リーディング・ライティング・スピーキングの 4 技能の育成を柱として指導を行った。必修科目の授業では検定教科書を活用しているが、口頭や筆記でのコミュニケーション活動を導入しやすい教材を選び、定期試験の形式

も含めてコミュニケーション活動を志向したカリキュラムをデザインしている。授業の一環として英語多読を取り入れ、学院図書室とも連携しながら図書室および英語科教員室の英語蔵書を増やし、国語科の「読書の記録」になった小冊子「English Reading Log」を配布して多読を奨励している。

また、学級内の英語力や英語使用経験の個人差を考慮し、1・2年生で1単位、3年生で2単位の習熟度別授業（2レベル）を展開している。Standard Groups の生徒に対しては、4技能を段階的に理解し実践できるよう支援し、英語力と自信の向上を図った。Advanced Level の生徒には、B2 レベル以上の言語運用能力の向上を目指し、主体的に学習に取り組むよう促した。英語のプレゼンテーションは、必修科目だけで1・2年生は年間5、6回以上、3年生で年間3、4回以上経験する。今年度は授業内プレゼンテーション後に質疑応答の機会を設けることで、即時に思考し英語で応答する力の育成を図った。

授業外でも英語の体系的なトレーニングを経験したい生徒のために、英語科は自学自修支援 LA/TA 活用制度を利用した「英語朝練」を2学期に実施している。今年度の「朝練」は TOEFL iBT の Speaking と Writing セクションの得点向上を希望する生徒の自学自修を支援することを目的とし、2名の LA の支援を得て 10 月～11 月に 9 回開講した。FD 活動としては、教育実習生を迎える時期に英語科教員が相互の授業を参観し、授業力の向上を目指している。

以上の取組を通して、英語をグローバルなコミュニケーションの手段として位置づけ、海外研修や留学プログラム、留学生との交流、国際的な行事への参加等に対応できる力の育成に努めた。

（カ）保健体育

保健体育では、保健と体育が繋がっていることを生徒が実感できるよう工夫しながら授業を展開した。

体育では、恵まれた体育施設をフル活用し年間を通じてさまざまな種目に取り組んだ。大久保山を走る持久走は、自然を走る体験になり、生涯スポーツのイメージ作りに有効であった。陸上競技場、野球場、サッカー場、テニスコートが独立して設置されていることから、存分に運動することができ、学びの機会が充実することで技術の習得にもつながった。さまざまなスポーツを通じて、仲間とコミュニケーションをとりながら協力・調整することで相互理解が進んだ。また、「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」の観点においても体験することで、生涯スポーツを考える時間として機能したと考える。

保健は「生きる力」とつながる、息の長い科目であることを生徒が実感し、日常生活とつなげることを目標にしてきた。知識の獲得と共にさまざまな題材での仲間との意見交換によって、多面的な意見を知り、自己の思考を深める時間としても有効であった。

（キ）芸術

芸術科の授業は、対面による教員と生徒、生徒同士の相互作用を通じて、より活発で充実した学習活動を展開することができる。授業後のアンケートにおいても、「一般教科の学習の合間に、良い気分転換となった」といった回答が多く見られ、学院生の学校生活の充実に寄与していることがうかがえる。

音楽 I では、1 学期に歌唱、打楽器アンサンブル、ハンドベル合奏などの活動に取り組み、2 学期には旋律譜に用いられるコード記号の理解を深めた上で、グループによる演奏発表を行った。各班が選曲した楽曲の一部について、旋律と伴奏に分かれて編成し、独自の合奏として表現する活動を行ったことは、クラス内の交流を深める機会となった。3 学期には、個人およびグループによる演奏発表を実施し、多様な表現が見られるとともに、生徒一人ひとりの学習成果が発揮された。

美術 I では、本庄キャンパス内の風景画、陶芸、平面構成、鋳金、将来の自画像などの課題に取り組んだ。作品制作を通して自己の内面と向き合い、新たな気づきを得るとともに、素材や技法の違いによる表現の可能性を探究した。また、ワークシートや鑑賞活動を通じて、自身のイメージを言語化し、作品を介した対話を行うことで、他者の視点や価値観への理解を深めることができた。これらの活動を通して、表現力の向上のみならず、思考力や集中力の育成にもつながっている。

本庄高等学院では、クラス単位で音楽Ⅰおよび美術Ⅰを履修している。そのため、グループワークを中心とした活動を通して、自然とクラス内の交流が促進されるとともに、協働的な学びの機会が多く創出されている。これらの実践を通じて、生徒は芸術科における学びの意義を実感し、本校における教育活動の充実につながる一年となった。

(ク) 家庭

家庭科では、“生き方を学ぶ・生き方を考える”という目的のもと、適切な教材を用意できた。特に、生徒たちの意見交換が進むような題材を取り上げることができた。調理実習は安全に配慮しながら計画通りに実施できた。3年生の選択食文化は少人数授業（20名）であったため、生徒たちは共に教え合いながら調理することができた。1年生の家庭基礎での実習内容は、焼き菓子、鍋料理（つみっこ：本庄市の郷土料理）であった。調理に対する関心は様々で、学習意欲が低い生徒もいる。そのような生徒に対しどんな動機付けができるかが課題である。

家庭科は、学びを深めるために多様な価値観に触れることが欠かせない。生徒が感想や意見を発表し、互いに刺激を受け合いながら生き方を語り合う。そのためにも生き活きと授業に参加できるように導かなければならない。学びが浅くならないよう、今後も工夫を重ねていく必要がある。

(ケ) 情報

2021年度から1年生に対して新教育課程「情報Ⅰ」2単位を実施しているが、プログラミング言語として以前よりも内容を強化した形で、大学各学部から要望の多い統計解析言語 R の基本を履修させている。オリジナルテキスト「統計解析言語 R の基本」を作成し、全生徒に配布して使っている。

2024年度以前の反省として、旧課程では1年次2年次1単位ずつ実施していた授業内容を、新教育課程では1年次2単位となるため、そのまま2学年分を移行したところ、課題に対する生徒負担感と教員の成績評価の負担感が増したことが挙げられる。2024年度以降はその反省を活かし、内容を削って精選を図った。

情報科の特徴として他校と異なる大きな側面は、本校の特色である探究活動（卒業論文）と有機的な連携を図るため、アカデミックリテラシー養成およびプレゼンテーションスキル養成に関する内容を強調していること、時代の要請に鑑み効果的な情報表現技術を中心に展開していることである。

また、AIをその代表とする日々進展する情報環境への対応力養成も、情報科の大きな任務となりつつある。まずは、学校でAI利用ガイドラインを策定し教員生徒間で共有するとともに、積極的な利用を開始した。

3.1.2 必修科目・選択科目

(ア) カリキュラム

カリキュラムは1年次から3年次まで、各年度32単位構成で3ヵ年96単位である。

- ・ 1年次：芸術科目を音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- ・ 2年次：「総合的な探究の時間」以外の科目は共通に履修する。「総合的な探究の時間」は、キャンパスを素材とし、学期ごとに輪講する「大久保山学」（2単位）として実施している。
- ・ 3年次：32単位の構成は、文理共通科目（17単位）、選択科目（14単位）HR（1単位）となっている。文系と理系では、必修選択については科目および科目数が異なる。文系は1科目2単位、理系は4科目12単位である。理系ではさらに「物理・化学選択」と「生物・化学選択」に分かれている。

(イ) 必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科・科目において年度始めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第1学年では、主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識して展開し、第2学年では学力の充実・発展の観点から教科・科目を構成を考えている。第3学年では大学での教育との連携を意図し、各科目の特徴を捉えて授業を展開している。

授業の基本方針は、基本事項を身につけさせる授業、探究や思考力・判断力・表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となる専門的な内容を盛り込んだ授業、社会との関わりを意識した授業を心がけている。具体的には理数教科で基礎学力の徹底を目的とした授業を展開し、質問対応や学力不振者への補講を実施した。語学や人文社会科学系の科目では、デジタル機器を通じた視覚教材を積極的に使用する授業、生徒が資料を作成し、発表する授業が散見された。これらはプレゼンテーションや論文執筆に向けた技術を習得することを目的としている。また、複数科目のコラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。

各科目の節々で本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がなされている。

(ウ) 選択科目

本学院のカリキュラムの最大の特徴は、3年次に豊富かつ多様な選択科目を履修することである。音楽や美術、第二外国語（フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語等）を含む選択科目は、必修選択と自由選択をあわせて、文系は7科目14単位、理系は5科目14単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

(エ) 英語能力試験

4月に GTEC Advanced (3技能)、9月に TOEFL ITP、11月に3年生のみ GTEC4 技能試験を実施した。GTEC、TOEFL ITP を実施する背景は、

- ① 学院生が自らの英語能力を客観的に知るため
- ② いくつかの学部進学の際に英語力が資格要件として課されているため
- ③ どの学部からも調査書と共に英語外部テストスコアの提出を求められていることに対応するためである。

(オ) 大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は70数ha、長辺は1.5kmに及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また、オオタカをはじめとする多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに本庄キャンパスのわきには利根川の支流である小山川、農業用水路である男堀川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（2012年11月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして2013年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」とした。

授業は第2学年に対して木曜1・2時限目に8講座を同時開講し、学期ごと（3学期制）に異なった講座を履修する。それぞれの講座は人文社会系・理数系・芸術系など、多種多様である。

生徒は8通りの組み合わせパターン(コース)の中から1つを選択する。今年度から3学期制とした。それぞれの講座の授業回数を揃えるために、通常の学期の区切りとは異なる「変則3学期制」により運営している。変則3学期制による大きな混乱は見られなかった。授業回数を揃えて実施できるため、担当教員が授業設計しやすく、それぞれの学期で均質な授業を提供できることが大きな利点である。

下表は2025年度のコース一覧である。

| コース | 1学期 | 2学期 | 3学期 |
|-----|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 | 学院生たちはどんなことを考えているのか?~データ分析の基本~ | 身近な地域をとらえるー災害・防災と空間認知の地理学ー | 大久保山から生まれるアート |
| 2 | 大久保山からみる古代・中世東アジアのヒト・モノの移動 | 大久保山から生まれるアート | 自然から学ぼう |
| 3 | 自然から学ぼう | 大久保山からみる古代・中世東アジアのヒト・モノの移動 | 学院生たちはどんなことを考えているのか?~データ分析の基本~ |
| 4 | 身近な地域をとらえるー災害・防災と空間認知の地理学ー | 大久保山の数理探究 | 大久保山から環境・エネルギー政策を考える |
| 5 | 大久保山から生まれるアート | 自然から学ぼう | 大久保山からみる古代・中世東アジアのヒト・モノの移動 |
| 6 | 大久保山から環境・エネルギー政策を考える | 理論と実践で学ぶ音楽史(オペラ史) | 大久保山の数理探究 |
| 7 | 大久保山の数理探究 | 大久保山から環境・エネルギー政策を考える | 理論と実践で学ぶ音楽史(鍵盤音楽史) |
| 8 | 理論と実践で学ぶ音楽史(管弦楽史) | 学院生たちはどんなことを考えているのか?~データ分析の基本~ | 身近な地域をとらえるー災害・防災と空間認知の地理学ー |

(カ) 理数探究基礎

第2学年に全員必修科目として理数探究基礎を1単位設置している。この科目では、将来、生徒たちが社会で生きていく力をつけていくことを目的としている。その力のひとつとしてSTEAMを設定し、その学びを具現化するため、授業では実験や観察を通して、以下のプロセスを念頭に置いた探究活動を行っている。

① 意思決定

探究の過程で必要な意思決定力をつけるためのOODAプロセス。

ア. Observe (観察)

イ. Orient (方向付け)

ウ. Decide (判断)

エ. Action (行動)

② 品質改善

実験装置や成果物の質を高めるためのPDCAプロセス。

ア. Plan (企画立案)

イ. Do (実施)

ウ. Check (評価)

エ. Action (改善)

(キ) 探究活動(卒業論文)

3年間の学習のまとめとして卒業論文を執筆させている。「自ら学び、自ら問う」という本学院の教育方針の具現化のひとつである。2年次の9月から10月中旬までの約2か月をかけ専任

教諭と一部の非常勤講師のからなる担当者と綿密な話し合いをした後にテーマを決める。その後、12月から3年次の12月まで約1年間で、論文を完成させる。テーマに関しては進学希望学部との関連は問わず、自由に選ばせている。

自分の決めたテーマにじっくりと向き合い、資料を集め考察し、自分の意見をまとめ、それを論理的な文章に表す。この作業を通じて、さまざまな課題に問題意識を持つこととその解決方法、学術的な調査の方法、客観的な説得力を持つ文章の書き方、著作権や知的財産権への配慮等を学びながら自分自身の考え方をしっかりと持つことができ、学部進学への自覚を促すことになる。

論文執筆期間の、4月と9月に4000字程度（英文はA3用紙5枚程度）の中間報告を義務付け、定期的に担当者と協議をすることになっている。

- ・ 第1次中間報告 4月
テーマ登録からすでに5ヶ月が経過している。この間の進捗状況を報告する。
- ・ 第2次中間報告 9月
夏休みを経過し、まとめの作業に入る前に、論文構成の確認のために目次を作る。

なお、論文の枚数などは以下の通りである。

- ① 用紙：A4、1ページに35行、1行は全角で40字（1ページあたり1,400字相当）。Microsoft Word（doc、docx）で作成。
- ② 分量 15枚以上。
- ③ 規程枚数には目次、本文、図表、注、参考文献リスト等を含める。但しアブストラクトは含めない。
- ④ 印刷：A4（縦書き、横書きともに同じ）用紙の片面に印刷する。
- ⑤ 学院から配布される所定のファイルにとじること。
- ⑥ 表紙には、配付の所定の表紙を使用すること。
- ⑦ やむを得ずタイトルの変更をしなければならない者は、事前に担当教員の許可を得ておくこと。
- ⑧ 英文の場合は、A4用紙にダブルスペース、半角で作成し、片面印刷で25枚以上とすること。枚数に含めるべき内容は和文の論文に準じる。Microsoft Word（doc、docx）で作成する。

【卒論指導】

早稲田大学ライティング・センターによる卒論指導

- ・ 動画視聴「学術論文における引用の作法」

早稲田大学には、卒論執筆指導を統括している部署がある。GECには、大学、大学院生レベルの指導法が地区移籍されているため、専門のかたに年3回講義をしていただいている。本年度は、3年生のLHRの時間を使用しGECが作成した講義ビデオを利用して論文執筆に関する授業を行った。

ビデオ視聴時には、付属のワークシートと資料を使用し、論文執筆の目的から情報収集法、考察のほう方法などを理解させている。

実施日は以下の通りである。

6月5日、9月8日、9月11日

【卒論報告会】

2月18日（水）13:50～15:40、稲稜ホールにて卒業論文報告会を開催した。2年生生徒に向け、早稲田大学本庄高等学院3年生3名と慶應義塾湘南藤沢高等部6年生1名が、卒業論文の内容と執筆過程紹介を報告した。

本年の報告のタイトルは以下の通りである。

- ・ 「渋沢栄一の民間外交観 東アジアへの指導的進出と欧米への協調」
- ・ 「大学入試における推薦入試についての考察 都市部と地方の分析を中心に」
- ・ 「紙飛行機の滞空時間を長くするために必要な要素」
- ・ 「人種主義社会アメリカに関する考察 アフロ・ラティーノの交差的アイデンティティを通して」

慶應義塾湘南藤沢中・高等部からは教員1名・生徒4名が来校し、卒業論文を通じて活発な学術交流を行うことができ、有意義な教育機会となった。2年生にとっては執筆を進める上での大きな指針となり、学習上の効果が達成されたことと思う。



2026 年度卒論報告会

3.2 課外講義

3.2.1 キャリア教育

本庄学院では、大学附属校としてミスマッチのない学部選択を目指すために、進路指導の充実に努力している。

従来の進路指導では、学部説明会を中心に早稲田大学の各学部で学べる内容を理解し、生徒が進学先を選択するというスタンスをとっていた。

しかし、留学やセカンドスクール、大学卒業後のキャリアプランなどを視野に入れた進路指導を考えた時、実際に仕事についている社会人や現役の学生の話聞き、大学生活のデザインをイメージした上で長い社会人生活を見通し、大学で何を学ぶかを考える機会を与えることも必要となってくる。そのためには生徒に、自分の将来をおぼろげにでもイメージさせ、そこへ至る過程としての大学生活について、高校生のうちからしっかりと考えさせる必要がある。

本校ではこのような進路指導観から、生徒が自分の将来を考えるきっかけとしてのキャリア教育を充実させるべく、社会人や大学教員、そして現役大学生・大学院生などから直接話を聞く機会を設けている。これを具現化する目的で、9月に集中的に行うキャリアデザインウィークと、月一度のペースで行うキャリアデザイン講座を実施している。

(ア) キャリアデザインウィーク

9月にキャリアデザインウィークを設け、現在の学院生活、大学、その先の将来を有機的に結び付けたキャリアパス意識を啓発するような講座を集中的に行った。以下の表にその概要を示す。

[進学の部]

9/10 (水)

- ・文学部「サリンジャーとプラス——アメリカ青春文学を読む」／27名 (参加者数、以下同)
- ・教育学部「遺伝と環境が生み出す個性 —発生から学ぶこと—」／36名
- ・創造理工学部「産業と環境は両立できる? ～土壌・地下水汚染を合理的に考える～」／40名
- ・スポーツ科学部「アスリート支援のための脳機能研究」／15名
- ・国際教養学部「日本文学を英語で勉強する?」／36名
- ・先進理工学部「人間を化学工学を使って解析しよう」／41名

9/17 (水)

- ・政治経済学部「日米安全保障体制の成り立ちとイギリスの役割」／41名

- ・法学部「夫婦同姓をめぐる法的問題」／35名
- ・文化構想学部「人形文化研究の世界へようこそ」／27名
- ・商学部「合理的意思決定と期待効用理論」／44名
- ・基幹理工学部「機械学習における数理モデルとAI応用」／80名
- ・社会科学部「海を渡った日本の着物—ファッションを介した日仏交流」／30名
- ・人間科学部「精神鑑定」／31名

〔就職の部〕

9/13 (土)

- ・コンサルタント企業勤務「駆け出しコンサルタントは見た」／19名
- ・コンサルタント企業勤務「正解の道はない！ワクワクとハッピーを追いかける人生選択」／47名
- ・小説家「早稲田大学で文学を学び、作家になるということ」／16名
- ・アナウンサー・ディレクター「テレビ局の現場と、そこから広がるキャリアの可能性」／36名
- ・地方銀行勤務「銀行と経理業務について」／16名
- ・IT企業勤務「自分らしい進路の見つけ方と、IT業界で働くということ」／29名

【進学の一部】

早稲田大学の各学部から講師が来校し、各学問分野で最先端をいく高度な内容の講義が、高校生の理解度に合わせて行われた。本庄高等学院の卒業生たちの学部や大学院での活躍を紹介してくれた講師もいて、会場は大いに盛り上がった。生徒たちは、講演の後も活発に質疑を行うなど、講師とのやり取りを行うことができた。附属校生徒として大学での学びを意識し、また、ミスマッチのない進路選択をするための情報を得る良い機会となった。

【就職の一部】

既に社会人となった6名のOBが講演を行った。多彩な就職先の卒業生が集い、学院生活や学部選択、大学生活や就職活動の話を熱心に披露してくれた。各分野でのトップランナー達の話は大変興味深く、参加した生徒たちは熱心に講師の話に耳を傾けていた。

(イ) キャリデザイン講座

9月に集中的に行うキャリデザインウィークと並行して、およそひと月に一度土曜日の放課後に、年間6回程度のペースで各界で活躍する本校OB/OGを招き、キャリアデザイン講座を開講している。以下は2025年度の実施内容である。

| | 日程 | 職業 |
|-----|-----------|---|
| 第1回 | 4月19日(土) | 建築家 |
| 第2回 | 4月26日(土) | 美術館学芸員・ピアニスト |
| 第3回 | 6月14日(土) | 総合商社 |
| 第4回 | 7月5日(土) | 国家公務員(内閣府) |
| 第5回 | 10月11日(土) | 総合商社 |
| 第6回 | 11月8日(土) | 早稲田大学法学学術院白石大教授・卒業生2名 (弁護士・ロースクール学生) |
| 第7回 | 2月7日(土) | 公認会計士(2名) |

3.3 行事

3.3.1 稲稜祭

昨年度の反省を踏まえ、4月から計画的に準備を進めることができた。前日準備日は途中から雨天となったが、体育館への移行準備を早期に進めていたことにより、ステージリハーサルは支障なく実施することができた。本番は天候にも恵まれ、各団体の協力のもと、ステージは概ね予

定どおり進行した。2日間を通じて、延べ4,000名以上の来場者数を記録した。

一方で、学院生の活動意欲や表現へのエネルギーは年々高まっている。より良いものを創り上げようとする姿勢は大変意義深いものであるが、それを適切かつ安全に発揮していくためには、教員による継続的な関与と支援が不可欠であることを改めて認識した。特に、行事運営における基本的なルールや社会的規範に対する理解については、引き続き指導の充実が必要であると考えられる。

教務および実行委員会においては、各種ルールの整備や予防的な取り組みを進めてきたが、制度面のみでの対応には限界がある。今後は、教員と学院生の双方が主体的に判断し、適切な行動を選択できるよう、日常的な指導と意識醸成を一層重視していきたい。

今後も稲稜祭が、学院生・卒業生・保護者・地域の方々に親しまれる行事であるとともに、受験生およびその保護者に本学院の魅力を伝える機会となり、教職員が一体となって支援できる行事として発展していくことを期待する。

3.3.2 体育祭

体育祭は種目の選定から運営まで生徒が主体となって進めた。個人種目の他、クラス全員リレー・綱引き・大縄跳び・ムカデリレーなどで競い体育祭を通じてクラスが思いをひとつにした。どの競技も、生徒が一生懸命競技に参加し、大いに盛り上がりを見せた。また、クラスの生徒へ向けての声援や、クラス全体での円陣など、集団生活の中でしか味わうことのできない貴重な経験もできた。

「紺碧の空」合唱で見た生徒達の熱量には、生徒達の心情が反映されていたと思うと、日常生活では得難い時間となった。

年々熱中症の危険性が高まり、それに対する対策が問われている。今年度は新たに日陰スペースを設置するなどした。幸いにも熱中症による体調不良は確認されなかった。

3.3.3 球技大会

第1・2学年で実施した。男子はソフトボールとサッカー、女子はバレーボールとドッチボールをおこなった。野球場、サッカー場、体育館をフル活用して、体育の授業だけでは得られない、クラスが団結する有意義な時間であった。天候にも恵まれ、秋晴れの青空のもと生徒の笑顔が輝いていた。

3.3.5 人権教育

本年度の人権教育講演は1月29日(木) LHRの時間を活用し、第2学年を対象に実施した。秋葉丈志准教授(早稲田位大学スチューデントダイバーシティセンター長)や学生スタッフの方々にお願いいただき、が「ダイバーシティ講演会」をテーマとする講演を行った。

また講演会終了後には、学生スタッフと希望した学院生で交流会(フリートーク)を行った。大学の学生スタッフの方々と積極的に意見交換を行い、ダイバーシティについて深く考える貴重な機会となった。

3.3.6 芸術鑑賞教室

芸術鑑賞教室は、11月5日(水)に本庄市民文化会館にて実施予定であったが、10月以降に全国的に流行したインフルエンザの影響により、校内においても感染が拡大したため、生徒の安全確保を最優先に判断し、2025年度の実施は中止とした(予定演目: スティールパンによる演奏)。

今後は感染状況等を踏まえつつ、次年度の円滑な実施に向けて準備を進めていく。

3.3.7 早慶野球戦観戦

本庄学院では毎年、春の六大学野球早慶戦初日へ1年生を参加させている。この日は3塁側慶應、1塁側早稲田のスタンドは早慶付属系統校生徒で埋め尽くされ、母校の応援を行う。母校が勝っても負けても、早稲田大学・慶応大学の一員になったことを実感する日となっている。

今年度は5月30(土)日に行われた六大学野球リーグ最終戦(早慶戦)の応援に第1学年行

事として参加した。試合後には、球場全体で早慶のエール交換を行い、早稲田としての一体感を感じる有意義な行事となった。

3.3.8 秋の学年行事

第1学年

10月23日(金)、東京都新宿区新宿末廣亭にて1年学年行事として寄席を鑑賞した。短い時間ながら、テレビで見ることがあっても対面でなかなか見ることができない日本文化の一端を知り、生徒同士が親睦を深める良い機会となった。

第2学年

2025年度の第2学年の学年行事は10月24日(金)に本学院の稲稜ホールにおいて学部説明会及び卒業生による座談会の2つの内容構成で行われた。前者の学部説明会については、5月31日(土)に本部キャンパスで行われた学部説明会の際に実施できなかった2つの学部、人間科学部及びスポーツ科学部の担当者による学部説明をそれぞれ質疑応答も含め30分ずつ実施していただいた。後半のプログラムは本学院卒業生3人による座談会形式の講演会であった。1人目は学院・学部時代に硬式野球部に所属し、卒業後フリーランスでスポーツ関係を中心にライターとして活躍している人、2人目は大学院創造理工学研究科博士後期課程に在籍しつつ設計事務所で建築士として勤務している人、3人目は学院時代は硬式野球部、学部時代は米式蹴球部に所属し4年次に主将として活躍、現在は大学院環境・エネルギー研究科修士課程に在籍している人、それぞれ15分程度、その後の質疑応答も含め13:00前には終了した。この卒業生による座談会は生徒に大変好評で、学院生にとって大いに刺激になったようである。秋の学年行事は単に学部説明会だけで終わるのではなく、生徒の先輩方が本校卒業後に学部や大学院、実社会で活躍している生の姿を見せることができた点で大変有意義なものとなった。

3.3.9 健康教育

【第1学年】

6月19日(木)「ストレスと上手につきあおう」、榎木啓二氏(早稲田大学学生相談センター心理専門相談員)

【第2学年】

9月11日(木)「デートDVとは～お互いを尊重したつきあい方を学ぶために～」、西山さつき氏(NPO法人レジリエンス代表)

【第3学年】

12月4日(木)「これから役立つメンタルヘルス～高校卒業の機会に知っておいてほしいこと～」、瀧村剛氏(久里浜医療センター精神科医)

各学年に1回、専門の講師を招き、心身の健康に関する健康教育講演を実施した。1年生は学院生活において相談スキルを上げること、2年生はお互いを尊重したつきあい方を学ぶこと、3年生はあらゆる依存症について知り、今後の人生において相談スキルを上げ、より良いストレス対処方法を選べるようになることを目標とした。講演は生徒にとって有意義な機会であるが、回数を増やしたり、保健の授業とリンクしたテーマ設定をするなど、より効果的な方法を探っていきたい。

3.3.10 交通安全等講話

4月9日(水)に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全防犯講話」を実施した。

本庄警察署員による講話で、交通課の方からは主に自転車の安全走行や登下校中の防犯に関するお話を、生活安全課の方からはSNSでの犯罪やトラブルに関する内容について、映像も交えた話をしていただいた。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者に

もなり得ることを踏まえ、継続して交通安全への啓発を行なっている。生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

3.4 課外活動

3.4.1 生徒会活動

4月の対面式では、全校生徒による校歌斉唱が行われ、應援部およびブラスバンド部による演奏・演技が新入生を迎える機会となった。続く新入生オリエンテーションでは、部活動紹介および文化部合同発表会が実施され、新入生の部活動選択に資する取り組みとなった。

11月の稲稜祭では、生徒会執行部によるキャンパスツアーや個別相談会を実施し、多くの来場者への対応を行った。恒例の生徒会誌は1月に発行し、全学院生に配付するとともに、2026年度新入生にも配付する予定である。

2月中旬には、本庄市主催の市内高校合同文化祭「七高祭」において、生徒会執行部をはじめとする学院生が運営メンバーとして参加した。各企画において本校生徒が中心的役割を担い、円滑な運営に寄与した。

また、10月中旬には赤十字血液センターによる献血バスを受け入れ、校内で献血活動を実施した。併せて、コンタクトレンズケースの回収活動も継続的に行っており、社会貢献活動の一環として一定の成果を上げている。

今年度の生徒会役員選挙・補欠選挙では、多くの役職において定員を上回る立候補があり、立候補者による呼び掛け等を通じて、選挙への関心の高まりが見られた。これらの取組を通して、生徒の自治意識の向上と主体的な活動の充実が図られている。

3.4.2 部活動

文化部門20、体育部門14のクラブが活動した。

各団体の活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、それぞれの目的に向かって活発に活動した。長期休業には多くの団体が合宿を実施し、生徒同士が親睦を深める有意義な時間を過ごした。

各種大会でも生徒たちが伸び伸びと力を発揮し、今年度は全国大会に陸上部、自転車部、囲碁・将棋部、書道部が出場、関東大会にソフトテニス部が出場するなど多くの活躍がみられた。

3.4.3 プロジェクト活動

課外活動に対する学院生のニーズが多様化していることに応え、部活動にない活動に取り組む有志団体について、顧問の指導のもとで充実した活動ができるよう2022年に設けた公認制度である。

2025年度は、国際交流プロジェクト、地域貢献活動、アントレプレナーシップ活動、附属連携プロジェクト、科学啓発プロジェクト、模擬裁判プロジェクトの6団体が公認され、活動を行った。

(ア) 国際交流プロジェクト

SGH・SSH活動で培った国際学术交流活動の発展・継続を図る。参加生徒は随時募集し、各活動において生徒主体でコーディネートを行った。

- ・ 国際学术交流 Waseda International Summer Exchange (WISE) 2025 の開催。
- ・ タイの Mahidol Wittayanusorn School との相互訪問交流活動。
- ・ 韓国の Hana Academy Seoul との相互短期留学、国際シンポジウム参加。

(イ) アントレプレナーシップ活動プロジェクト

アントレプレナーシップ教育とは、狭義には「起業家教育」と訳される。日本ではこの認識が一般である。しかし、世界的には「答えのない問題に対して、解決方法のデザインを探るデザイン思考プログラム」という意味に捉えられている。アメリカのスタンフォード大学の d-school は世界的中心の1つであり、本庄学院も過去3年間指導を受けている。

本庄学院では 2021 年度より早稲田大学アントレプレナーシップセンターとの連携で実施している。また、度々日本政策金融公庫の指導を受けている。

(ウ) 地域貢献・連携プロジェクト

本庄市および近隣地域への貢献活動・還元活動、地域企業との連携活動を行う。参加生徒は随時募集した。具体的には、以下の活動を主とした。

- ・ 地域小学校への総合学習支援活動（本庄早稲田国際リサーチパークとの連携）
- ・ 地域小学校への国際理解教育支援活動（本庄早稲田国際リサーチパークとの連携）
- ・ 本庄市民総合大学・こども大学本庄への協力（本庄市との連携）
- ・ 地域企業との連携活動
- ・ こども科学教室の開催（本校主催）
- ・ その他地域との連携活動

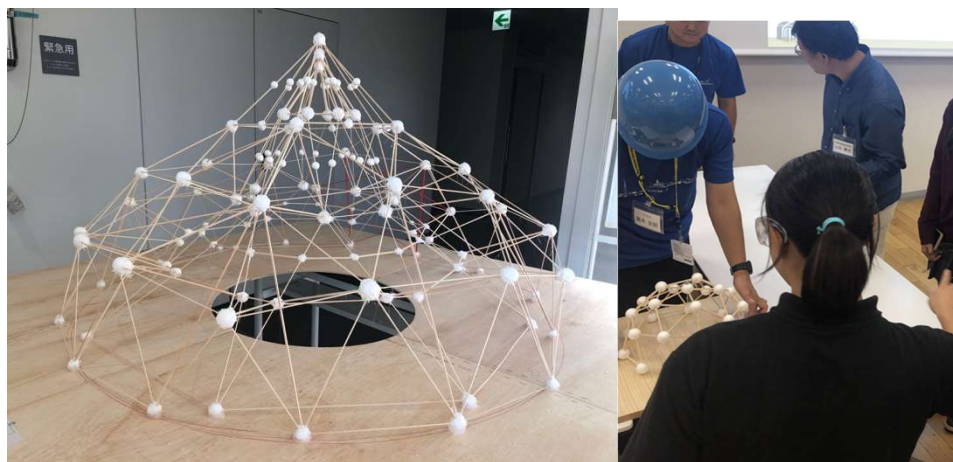
(エ) スペースアーキテクチャープロジェクト（日鉄エンジニアリング主催）

（株）リバネスが企画・運営する高校生向けの STEAM 教育プログラム。このプログラムでは、高校生が最前線で活躍するエンジニアから知識や視点を学び、約 8 ヶ月間で社会課題の解決方法を学びます。具体的には、洋上風力発電の浮体部分の開発や、効果的な排熱利用の方法を競い合うなど、様々なプロジェクトを通じてエンジニアリングの魅力を体感する。

本学院が参加したプロジェクトは、20XX 年冬季五輪競技場の設計を想定し、巨大空間建築物である競技場の設計、さらに実際の大きさの 1/100 程度の構造模型の製作を行うものである。

最終コンテストでは、積雪などを想定した耐荷重試験の他、競技場の後活用や環境配慮についてのアイデアなどについて、参加チーム同士で開発の成果を競いあった。以下はレギュレーションである。

- ・ 構造模型のサイズは、アイススケートダブルトラックと観客席および付帯施設（直径 120 cm 高さ 15 cm の円錐）を覆えること
- ・ 運営から支給する建設地盤（180 cm x 180 cm）に収まるように建設すること
- ・ 積雪に耐えうる強度を持つ構造であること
- ・ 構造について工夫を凝らしていること



作成した作品と作成の様子

3.4.4 科学教育課外プログラム

(ア) 特別講義「これがサイエンスだ！」

本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施した。この講座は 2013 年度から開始され、毎年数回、生徒たちに対して科学に興味を持つきっかけになることを目的に実施している。

- ・ 第 1 回 4 月 25 日（金）「射影平面と代数曲線」数学科教諭 太田洋平
- ・ 第 2 回 5 月 1 日（木）「平面代数曲線とその特異点解消」数学科教諭 太田洋

- ・ 第3回 6月18日(水)「納豆に酢をかけると？」化学科教諭 中村純
 - ・ 第4回 9月30日(火)「確率から学ぶ測度のはなし」数学科講師 由居嵩敏
 - ・ 第5回 12月9日(火)「巨視的量子現象とは何か(ノーベル物理学賞2025解説)」数学科教諭 峰真如
 - ・ 第6回 12月10日(水)「MOFの世界(ノーベル化学賞2025解説)」化学科教諭 中村純
 - ・ 第7回 2月13日(金)「この世のあいまいさを明瞭に — ファジィ理論への誘い —」数学科講師 山家大誠
 - ・ 第8回 2月17日(火)「面積を求めるためのてんやわんや」数学科教諭 成瀬政光
- また今年度も、長期休業中の合宿を実施することができた。夏合宿(2025年7月)と春合宿(2026年3月)を実施した。この合宿は「授業では扱わない専門性のある内容を探究し、進学や将来について新たな視点をもつ」ことを目的とし、宿泊しながら一つのテーマを探究する。最終日には各パートから成果報告を行う。

夏合宿は2025年7月23日(水)から25日(金)に、参加者は数学・化学・深海探査・宇宙線の4つのパートに分かれ、以下のテーマで3日間かけて探究活動を行った。

- ・ 数学パート:射影平面(平行線も交わる平面)のすばらしさについて
- ・ 化学パート:電子の動きによって物質の性質や反応を説明する有機電子論について
- ・ 深海探査パート:オリジナルの深海探査機の3Dモデルについて
- ・ 宇宙線パート:体育館の外や中、本庄市の古墳における宇宙線の観測結果や、宇宙線の性質、宇宙線を観測する装置の具体的な仕組みについて

また、探究活動の合間には特別講義が行われ、23日(水)には東京科学大学 大学院生の西森氏から「鳥人間の力学」、24日(木)には数学科矢島教諭から「絶対値付きの関数で遊ぼう」というタイトルで講義が行われた。 <https://www.waseda.jp/school/honjo/news/7581>



宇宙線を測定している様子

成果報告会での生徒発表の様子

春合宿は2026年3月11日(水)から13日(金)の2泊3日で行われた。参加者は代数・確率・放射線の3つのパートに分かれ、以下のテーマで3日間かけて探究活動を行った。

代数パート:整数の分割とヤング図形

確率パート:確率過程による社会現象の数理モデル化

放射線パート:放射線によるがん治療のシミュレーション

また、探究活動の合間には、12日(木)に化学科中村教諭から「分子模型で学ぶ立体異性体」というタイトルで特別講義が行われた。

なお、最終日の成果報告会・卒論報告会の時間は、入学予定の生徒にも公開した。

合宿を通じて、普段経験できない「時間を気にせずチームワークでサイエンスをする」という経験ができたことは大変有意義だったように思える。

(イ) 河川研究班の活動

河川研究班の活動は、2009年に開始された。当時本庄市・早稲田大学榊原研究室が進めていた元小山川の河川環境改善活動に加わる形で、当時のSSHプログラムの1つとして実施された。

2012年には同様に河川環境保護活動を行っていた本庄市立藤田小学校と連携し、年2回の合同河川調査と年8回の5・6年生の総合学習の授業を本校生徒が受け持つこととなった。河川研究班は部活動ではない。この活動に興味を持つ生徒を毎年新年度に募集し、10～15名の生徒で活動している。多くの生徒は3年間継続する。今年度は、合同河川調査を5月、10月の2回、授業は6回実施した。

なお、河川研究班の活動のポイントの1つは、河川環境の様子を広く市民に広報・啓蒙することを目的とした市民シンポジウムの開催である。3月21日（土）午後に早稲田国際リサーチパークで「川のシンポジウム」を実施した。昨年度は三重の小学校および石川県の高校が参加したが、今年度は別の三重県の小学校が対面で、秋田県の小学校がオンラインで参加した。この後に続く形で開催された、関東地方の河川環境保護活動に関わる人達が参加する「いい川づくりワークショップ関東大会」では、本庄学院から2チームが参加し、1チームが特別賞を受賞した。



3月21日に開催された川のシンポジウム

今年度の河川研究班の活動として特筆すべきは、台湾での河川調査と国立台南大一高級中学との交流である。

2025年2月に本庄市と台湾台南市が友好交流都市協定を結んだことを受け、河川研究班のかねてよりの念願であった海外での河川調査の可能性を台南市に打診したところ、台南一中から了解を得ることができた。8月13日に河川研究班12名が台南市へ出向き、台南市を流れる曾文溪の上流において合同河川調査を実施した。その日の午後には、学校に戻り成果確認を行った。2026年7月には台南一中生徒が本校を訪問し、本庄市の合同河川調査を行う予定である。



曾文溪における河川調査

(ウ) スーパーサイエンスクラブ「ビオトーププロジェクト」

早稲田大学本庄キャンパスに数十年前に作られた調整池を利用し、生物多様性の保全において重要な役割を果たすビオトープ作りを行っている。ビオトープは以下の点において本庄高等学院の教育に貢献することが期待される。

- ・ 生物多様性の維持: ビオトープは、特定の生物が生存可能となる環境条件を整えた空間であり、多様な生物種が共存する場を提供します。
- ・ 自然環境の保護: ビオトープは、自然環境を模した生物の生息空間であり、人間が意図的に作り出したり、自然の状態を保全したりすることで、多様な生物種が共存する場を提供します。
- ・ 環境教育: ビオトープは、地域住民や子供たちにとって自然と触れ合う機会を提供し、生きた環境教育の場となります。
- ・ 生態系サービスの提供: ビオトープは、地球温暖化の影響を緩和する役割も果たし、植物による二酸化炭素の吸収や、水源地の保全による洪水防止など、自然のサイクルを支え、人間社会にも恩恵をもたらします。

ビオトープ作りは、持続可能な社会の実現に向けた重要なステップであり、地域の自然環境を守る意識を育むことを期待している。



3.5 国内外交流・研修

3.5.1 修学旅行

本年度の修学旅行は従来本学院が行ってきた韓国と台湾への海外2コースを実施した。日程は10月20日(月)から24日(金)の4泊5日で、韓国コースの交流相手校は安養外国語学校、台湾コースの交流相手校は台中市立台中第一高級中等学校である。行き先に関しては生徒の希望を優先したが、交流相手校の受け入れ人数に合わせて事前に調整を行った。また、修学旅行は班単位での行動を原則としているため、事前学習や修学旅行時のホテル宿泊及び現地での自主研修は班単位で実施した。

今年度の行程では、おりしも日本全国的に流行していたインフルエンザ発症者が両コースで複数発生し、隔離や病院搬送など副次的な対応が生じた。引率体制の補強や、特にホテル移動の多い台湾コースにおいて移動の削減など、修学旅行体制の見直しの議論を行うきっかけとなった。

(ア) 日程：2025年10月20日(月)～10月24日(金) 4泊5日

(イ) 合計：生徒 319名 不参加 5(男子 2、女子 3)

【韓国】

- ・ 生徒：130名(男子 85、女子 45)
- ・ 引率 団長：半田亨(学院長)
- ・ 第3学年：3名
- ・ 学年外：3名
- ・ 看護師：1名
- ・ 交流校：安養外国語学校

【台湾】

- ・ 生徒：189(男子 97、女子 92)
- ・ 引率 団長：高山正弘(第3学年主任)
- ・ 第3学年：3名
- ・ 学年外：6名
- ・ 看護師：2名
- ・ 交流校：台中市立台中第一高級中等学校

【不参加者】：5名

※不参加者へは、修学旅行期間中の学習計画表を事前に提出させ、修学旅行期間中は9:10～13:10まで情報教室で各自の課題に取り組ませた。また、水曜日と木曜日に2時間ずつ稲稈祭準備活動をした。

3.5.2 海外からの訪問交流

2025年度は海外高校4校(台中一中・SCS・MWIT・HAS)との交流活動を本校で実施できた。

台中一中からの来校生徒には、授業体験だけでなく、本校の体育祭に参加してもらった。チームの勝利や行事の成功といった共通の目標に向かって、在校生と協力する姿が見られた。台中一中は本校の修学旅行における訪問先にもなっている。5月に本校に来校した台中一中生徒と、10月の修学旅行で再開することができ、友好関係を深めることができた。

MWIT・HAS両校とは交換留学の形式で交流している。本校での交流のあと、本校生徒が相手校に訪問した(MWITへは1月に、HASへは3月に、本校生徒をそれぞれ派遣)。いずれの学校との交流も来校生徒は少人数だが、来校目的に沿って濃密な体験ができるよう工夫が重ねられた。学内での授業体験やワークショップだけでなく、地元小学校との交流を実施するなど、本校生徒はもちろん、広く地域の子供たちが関われるような機会が設けられた。

SCSとは2024年度から対面での交流を行っており、2024年度に本校がSCSを訪問し学術交流

を行ったことに続き、2025年度は本校にSCSを招いて学術交流を行った。「Water Issues in Japan and Korea」(日韓で考える水問題)をテーマに、オンラインによる事前学習から7月の対面によるアカデミックシンポジウムまで、双方の生徒が英語で議論を重ねてグループごとに設定した課題を探究した。

◆台中市立台中第一中学(台中一中・台湾)

- ・ 滞在期間：5月25～31日 人数：生徒10名、引率教員1名
- ・ 目的：文化体験
- ・ 来校交流企画：歓迎交流会、授業体験、学校行事体験、本庄市内小学校訪問
- ・ 交流行事レポート：
「藤田小との春の合同河川調査」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/7141>
- ・ 「台中市立台中第一高級中学10名の生徒が本庄学院を訪問」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/7151>

◆Saeronam Christian School(SCS・韓国)

- ・ 滞在期間：7月16日～7月19日 人数：生徒11名、引率教員2名
- ・ 目的：国際学術交流(テーマ：Water Issues in Japan and Korea)
- ・ 来校交流企画：歓迎交流会、ダム見学・博物館見学、フィールドワーク、研究発表
- ・ 交流行事レポート：「Waseda International Summer Exchange(WISE)2025を開催しました！」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/7692>

◆Mahidol Wittayanusorn School(MWIT・タイ)

- ・ 滞在期間：10月13日～10月19日 人数：生徒8名、引率者2名
- ・ 目的：河川研究を核とした探究学習、フィールドワーク、文化体験
- ・ 来校交流企画：博物館等見学、科学ワークショップ、文化紹介、授業体験
- ・ 交流行事レポート：「タイのMWITの皆さんが本庄学院を訪問しました！」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/8076>

◆Hana Academy Seoul(HAS・韓国)

- ・ 滞在期間：1月10日～1月18日 人数：生徒6名
- ・ 目的：短期交換留学(授業・生徒寮生活体験、文化体験、フィールドワーク)
- ・ 来校交流企画：都内研修、川越研修、文化紹介、授業体験
- ・ 交流行事レポート：「Hana Academy Seoulとの交流」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/8533>

3.5.3 留学

(ア)長期留学生の受け入れ

今年度は6人の長期留学生が本校に滞在した。日台交流協会の派遣留学生として2024年9月に留学を開始した呉英齊さん(～2025年7月)と2025年9月に留学を開始した黄芷瑜さん(～2026年7月)、文部科学省と公益財団法人AFS日本協会群馬支部の「架け橋プラス高校生」としてGallanut Puakpiboonさんと兪思羽さん(2025年9月～12月)、AFS群馬支部のTroy Robert Uchimiyaさん(2025年4～7月)、公益財団法人YFU日本国際交流財団のEmily Lauren Wildingさんである。

留学生の学齢や日本語レベルと本学院の教育プログラムを考え、今年度は呉さんとTroyさんは3年生、黄さんとEmilyさんは2年生、Gallanutさんと兪さんは1年生が受け入れクラスとなった。留学生への支援は受け入れクラスの担任と留学・交流委員、生徒担当教務主任と寮主任が分担して行った。授業では留学生それぞれの言語レベルと興味関心に応じて所属クラスの通常授業および他学年・他クラスの授業を組み合わせた個別の時間割を作成する形で支援する。6

名とも日本語能力の向上に高いモチベーションを有しており、学校生活や放課後の日本語補習、自学自習を通して、主に日常会話や読み書きの分野で明確な成長が確認できた。

6人は部活動や学校行事に参加するほか、地域の国際理解を深める企画や他学年の行事にも参加した。Emilyさんを除く5人は本校の寮で生活し、本校の生徒が日常的に外国語話者と交流することで語学学習の動機を得るきっかけとなった。また、3.5.2で述べた海外からの交流訪問にも多数参加し、長期留学生ならではの視点で日本文化や本校の文化を紹介するなどし、短期留学生がいち早く日本で生活に慣れることができるよう働きかけた。

生徒たちは受け入れクラスになることを喜ぶ気風が見られる。在校生にとって複数の長期留学生と接するインパクトは大きく、海外交流校への派遣プログラムに応募する際に「留学生と親しくなったことで自分も海外の学校に行きたくなった」と述べる生徒が多い。また、国際交流の経験をもとに進路や将来設計を具体化する生徒もいて、キャリア教育の観点でも好影響がみられる。

授業や部活動で関わる教職員が増えたことで、支援や指導の方法などを教職員間で意見交換する機会が増え、留学生の個性を大事にしながら正規学生と一緒に育成していく気風が醸成されつつある。今後、業務の見直しやリバランスを行うことで、教員負担を平準化する必要がある。

留学生個々の情報は以下の通りである。

- ① 呉 英齊さん (台湾)
 - ・ 支援団体：日本台湾交流友好協会
 - ・ 所属クラス：3年C組
 - ・ 通学形態：梓寮
 - ・ 滞在期間：2024年9月1日～2025年7月15日
- ② 黄 芷瑜さん (台湾)
 - ・ 支援団体：日本台湾交流友好協会
 - ・ 所属クラス：2年B組
 - ・ 通学形態：梓寮
 - ・ 滞在期間：2025年9月1日～2026年7月17日
- ③ Troy Robert Uchimiyaさん (アメリカ)
 - ・ 支援団体：AFS群馬支部
 - ・ 所属クラス：3年H組
 - ・ 通学形態：早苗寮
 - ・ 滞在期間：2025年4月4日～2025年7月16日
- ④ Emily Lauren Wildingさん (アメリカ)
 - ・ 支援団体：AFS群馬支部
 - ・ 所属クラス：3年H組
 - ・ 通学形態：ホストファミリー宅から通学
 - ・ 滞在期間：2025年8月19日～2026年1月8日
- ⑤ Gallanut Puakpiboonさん (タイ)
 - ・ 支援団体：AFS群馬支部
 - ・ 所属クラス：1年C組
 - ・ 通学形態：梓寮
 - ・ 滞在期間：2025年8月24日～2025年12月13日
- ⑥ 俞 思羽さん (中国)
 - ・ 支援団体：AFS群馬支部
 - ・ 所属クラス：1年E組

- ・ 通学形態：梓寮
- ・ 滞在期間：2025年8月24日～2025年12月13日

(イ)「荻野奨学金」を活用した受入留学生支援（第5年次）

本学院は、早稲田大学で学ぶ留学生の学習支援のための指定寄付「荻野奨学金」を活用する箇所の一つとして選ばれ、21年度から25年度までの5ヶ年間に受け入れる留学生の学習、および留学生と在校生との共同学習にこの奨学金が使えるようになった。

活用初年度に、留学・交流委員会で活用ガイドラインを作成し、使用目的が

- 留学生が日本および学校生活のルールや慣習を理解し、大きな支障なく心身ともに健康に滞在できるための支援
- 留学生が日本語を学び、高校生の生活をより深く理解するための支援（公立学校や早稲田大学訪問、部活動大会の参加支援などを含む）
- 留学生が日本の風土・文化・芸術・歴史や現代社会の動き等を、学院生と共に学ぶための支援

に原則として該当するものに支出するとした。25年度の活用事例は以下の通りである。

- English Kids 参加（目的 A、C）
英語でコミュニケーションすることの楽しさを小学生に伝えることを目的として毎年開催しているイベント「English Kids」に留学生が本校生徒とともに参加するための経費として使用した。小学生との交流によって、留学生自身の地域・学校理解につながった。
- 学校行事等への参加（目的 B、C）
留学生が他学年の学年行事に参加する場合の経費として活用した。5月の早慶戦（大学野球）観戦、8月の東京一日研修、10月の2学年行事（新宿御苑散策）に参加した。
- 2024年度は留学生3名の日本語力が高かったことと、国際交流企画が活発化しガイドライン C に当たる特別企画を組む余地がなかったことから、過去3年より活用例は少なくなった。
- 短期留学プログラムの充実（目的 B、C）
3.5.2で述べた5月の台中一中来訪や1月のハナ高校来訪において、短期留学生がワークショップや和菓子作り体験などに参加するための費用として充てた。

(ウ) 短期海外派遣⁴

2025年度は以下の短期海外派遣プログラムを実施した。2024年度に韓国 Saeronam Christian School (SCS) へ本校生徒を派遣したが、SCS と本校は近年一年ごとにホスト校を交代で担当している。3.5.2で述べたように、2025年度は本校がホスト校を務めたので、2026年度は再びSCSがホスト校となる（本校から生徒を韓国に派遣する）予定である。短期留学プログラムへの在校生および保護者の関心は高く、参加者の帰国後の国際交流参加への意欲や留学志向は確実に高まっている。一方、渡航費や諸経費の高騰は参加申し込みへの大きな制約になってきている。また、海外派遣プログラムは事前準備や手続き、引率にかかる教職員負担が大きくなりがちである。外部連携を図る、これまで本校が海外校と築いてきた運営ノウハウを引き継ぎ深化させるなどの方策で、一過性のイベントに終わらない持続可能な教育プログラムの構築を目指す必要がある。

① 早稲田大学高大連携推進課 および国際部・WASの支援によるプログラム

◆Kia Ora Program 2025 Summer

- ・ 派遣国：ニュージーランド 人数：27名（引率は主催者）
- ・ 期間：8月9日（土）～8月30日（土）

◆Kia Ora Program 2026 Spring

- ・ 派遣国：ニュージーランド 人数：9名（引率は主催者）
- ・ 期間 3月21日（土）～4月1日（水）

② 交流協定校との学術交流・短期交換留学プログラム（高校間の協働研究・交流プロジェクト）

◆16th International Symposium Sustainable Development (Hana International Symposium)

- ・ 派遣国：韓国 人数：生徒9名、引率者1名
- ・ 期間：7月20日（日）～7月25日（金）
- ・ 目的：国際高校生シンポジウム参加
- ・ 滞在地：Hana Academy Seoul
- ・ 参加レポート：「16th Hana International Symposium 報告」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/7546>

◆上海・蘇州フィールドワーク

- ・ 派遣国：中国 人数：生徒6名、引率者2名
- ・ 期間：7月28日（月）～8月2日（土）
- ・ 目的：蘇州中学における研究報告会、蘇州・上海において近代日本中国関係に関する史跡・博物館見学
- ・ 滞在地：蘇州市・蘇州中学、上海市

◆タイ研修、International Science Schools Fair 2025

- ・ 派遣国：タイ 人数：生徒10名、引率者2名
- ・ 期間：1月28日（水）～2月5日（木）
- ・ 目的：研究活動・授業参加、フィールドワーク、文化交流
- ・ 滞在先：Mahidol Wittayanusorn School, Mahidol University
- ・ 参加レポート：「体験集レポート」
<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/8671>

◆Hana Academy Seoul との短期交換留学

- ・ 派遣国：韓国 人数：生徒6名（鷗友学園・学習院と共に参加。引率者はホスト校）
- ・ 期間：3月19日（木）～27日（金）
- ・ 目的：短期交換留学（授業・生徒寮生活体験、フィールドワーク、ホームステイ）
- ・ 滞在先：Hana Academy Seoul

(エ) 留学・交流委員会（教職員）の業務

2025年度は2024年度に引き続き数多くの海外交流プログラムを実施することができ、ポストコロナの海外交流を軌道に乗せることができた。留学・交流委員会は8名の教員、教務副主任、3名の職員で構成される。前者8名が、前年度から定型化されつつある業務へ協働的に対応できるよう、年度はじめに1年間の業務計画を立てた。一方、マニュアル化されていない、またはマニュアル化されてはいるがそれが十分に学校内で浸透していない業務も存在し、その一部については委員長・教務副主任・職員の間で業務フローを確立した。一例として、時期ごとの長期留學生への対応方法の確立があげられる。また、プログラムに応じて適切な生徒指導・生徒派遣ができるよう、教務室、事務所、保健室、生徒寮関係者、学年団、留学支援団体と連携し、細かな情報収集に努めている。中長期留學生の受け入れについては派遣団体の努力で日本語力が高い生徒が選抜されてきたこともあり、多様な教科の組主任のクラスで受け入れられている。寮主任と寮パディの尽力もあり、「自分のクラスに留學生が来てほしい」と生徒からアピールが来るほどになっている。

当委員会の業務は以下の3種類に分類できる。

A) 中長期留學生の受け入れ

受け入れの受諾と条件の確認、生徒寮関係者との連絡、受け入れ学年の委員会案提示、受け

入れ開始時のアレンジ、受け入れクラスの組主任とアカデミック・アドバイザーとの懇談、留学生の学校および寮生活への適応への目配りと助言、定期試験および学校行事への参加での関係者との連携、留学終了時のアレンジ、荻野奨学金の活用

B) 海外派遣プログラム関連

派遣生徒選出の条件および業務分担の協議、派遣生徒選出業務、(必要に応じて) ホスト校・旅行社との連絡・渡航準備支援、(必要に応じて) 参加者への事前事後ガイダンス・参加レポート提出要請、教諭会資料・公欠願等の目配り

C) 来校交流プログラム関連

委員会担当業務について関係者(教務・学年・プロジェクトリーダー等)との懇談・業務分担、(必要に応じて) 来校交流企画立案・担当者決め・諸事手配など、生徒リーダー・パディの募集・事前指導など、経費の出所確認と管理、(必要に応じて) 教諭会資料・公欠願等の目配り

委員会での協議は内容とタイミングに応じて対面協議とメール協議を使い分けた。今年度の主な議題は以下の通りである。

- ・ 蘇州外国語学校からの MOU 締結依頼に関して
- ・ 2027 年度の来校交流プログラムの方針協議
- ・ 2027 年度スイス公文学園サマープログラムの派遣生徒決定に係る業務分担の決定
- ・ 2028 年度以降の修学旅行の行先に関する協議

(オ) 在校生の長期留学

今年度の留学(今年度中に出発したもの)は、第1種留学(休学を伴う留学)が2名である。2025年度は第2種留学(休学を伴わない留学)の対象者はいない。留学先と留学期間は次の通りである。

- ・ 第1種留学 香港(2025年8月~2026年6月) 1年生男子
- ・ 第1種留学 ベルギー(2026年1月~2026年12月) 1年生女子

近年、留学志向が高まっているようである。入学当初から、留学に向けた手続きについての質問がさまざま寄せられている。

3.5.4 海外交流プログラム

ここでは、修学旅行以外の学校間交流について記載する。

(ア) ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」開催

これはコロナ禍が始まった2020年、授業も全てオンラインだった時期に、本校が国際交流に熱心な学校と思って入学した生徒が多いこと、生徒たちの国際交流への興味をつぶしたくないことから、開催したイベントである。その後、新入生が充実した学校生活を送るためには予めイメージしておいてもらうことが効果的であること、保護者の方の理解につながることから、継続して開催している。

今年度は新入生を主対象に3月20日(金)に実施した。どうせならば学校の様子を理解してもらうため、保護者の参加も認めたいと考え、19時~20時の時間帯でZoomにより実施した。在校生・新入生・保護者を含め160人が参加した。

(イ) ICRF(International Collaborative Research Fair)2025¹

このイベントは、立命館高校が主催する共同研究を必須としたオンラインの高校生科学シンポジウムであり、海外8カ国から19校、国内22校が参加し、海外校と国内校がペアリングの上で共同研究テーマについて8ヶ月取り組んだ成果を、2026年1月24日(土)に発表した。また、連携校6校が12月21日~25日の日程で台湾とカンボジアに分かれ、対面での共同実験を実現した。

¹ 50pにも関連記事を記載。

本校は 2 名の生徒が参加し、台湾高雄市立高雄高級中学の生徒とともに「小型水力発電機の羽の形状と発電効率の関係」について成果を発表した。



台湾高雄高級中学における本校生徒の発表の様子

(ウ) JSSF (Japan Super Science Fair) 2025

このイベントは、立命館高校が主催する世界最大規模の高校生国際科学シンポジウムであり、今年度は世界 20 カ国から 31 校、国内 12 校の生徒教員が参加し、11 月 2 日～6 日の日程で立命館高校・立命館大学琵琶湖草津キャンパスを舞台に開催された。

本校からは 2 名の生徒が、運営スタッフ・発表者として参加した。稲稜祭が重なったため、参加期間は 11 月 4 日～6 日に限定された。

(エ) Hana Academy Seoul (HAS) との交流

HAS とは 2015 年姉妹校の MOU を締結して以来、コロナ禍をはさみ 3 人の生徒の相互短期留学を行っている。また、7 月に HAS 主催の国際高校生シンポジウムである Hana International Symposium への招待参加をしている。

今年度は 7 月 20 日～25 日の間、9 名の生徒が Hana International Symposium に参加した。また、1 月 10 日～18 日の間 HAS 生徒 6 名（女子 3 名、男子 3 名）の短期留学を受け入れ、3 月 19 日～27 日の日程で HAS へ生徒 6 名（女子 3 名、男子 3 名）を派遣した。



シンポジウムにおける本庄学院の研究発表

(オ) Thailand Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) との交流

MWIT との関係は 2005 年に始まり、2015 年から 10 名程度の生徒の相互訪問を行っている。今年度は、10 月 13 日～19 日の間、10 名の生徒 2 名の教員を受け入れた。MWIT 生徒 2 名が

来日後インフルエンザを発症したため、隔離・病院搬送が生じ、また校内への感染拡大を防ぐために交流活動の制限の必要が生じたことは残念であった。

2025年1月28日～2月5日の間、10名の生徒がMWITを訪問した。



部活動参加（タイボクシング）

（カ）国立台南大一高級中学（台南一中）との交流

～に記載したように、2025年2月に本庄市と台南市との友好交流都市協定締結をきっかけに、台南一中と本庄学院との交流が開始された。2026年3月には、学院長が台南一中を訪問し、MOUを締結した。締結の様子は、台湾国内の新聞にも取り上げられた。



MOU 締結の様子

（キ）韓国 Saerom Christian School (SCS) との国際学術交流

SCS とはオンライン学術交流を継続してきたが、2024年度にSCSを本学院生と引率教員が訪問し、対面による国際フォーラムが行われた。これと対になるものとして、2025年度は本学院においてWaseda International Summer Exchange (WISE) 2025という国際学術交流を開催した。3泊4日の日程によってSCSの生徒11名・教員2名を招聘し、本学セミナーハウスにて共同生活を送りながら、シンポジウム（基調講演・学術研究発表）、フィールドワーク、文化交流などを核とする交流活動を行った。学術研究の主題は「水問題 (Water Issues)」であり、主に日韓両国の河川環境や治水について探究した。本学院生は志望者のうちから選抜された30名がバディ・スタッフ・リサーチプレイヤー等として参加した。2026年度は本学院生が再びSCSを訪問し、SCSでの国際フォーラムに参加する予定である。

3.6 高大一貫教育

3.6.1 学部説明会

第2学年の生徒全員を対象に早稲田大学全ての学部の説明会を実施した。5月31日（土）に早稲田キャンパスを訪問した。目的は、自身の高校生活の意義を見つめ直すことや、ミスマッチの無い進路選択ができるように情報を取得すること、そして何のために大学生になるのか深く考える機会を持つことである。各学部の説明後には質疑応答の時間が設けられ、生徒からは卒業後の進路、カリキュラムの詳細、類似学科との違い、在学中の留学制度、資格の取得、コース選択の注意点など、自身の目標設定・進路選択へ繋げるための活発な発問がなされた。

<5月31日（土）早稲田キャンパスにて実施>

文学部、文化構想学部、基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部、国際教養学部、教育学部、法学部、社会科学部、政治経済学部、芸術学校、商学部

<10月24日（金）本庄キャンパスにて実施>※Zoomでの実施

スポーツ科学部、人間科学部

また、学部説明会は本学院が計画実施しているイベントであるが、学部側からも積極的に学部理解を深めることを目的として、本学院に向けた説明会が開催されている。2025年度は以下の会が実施された。

- ・5月1日（木）「日本医科大学説明会」
学院生・保護者対象
- ・8月31日（日）9月14日（日）「法学部への招待」
学院生・保護者対象

3.6.2 学部開放科目（高校生特別聴講制度）

高校生特別聴講制度とは、大学生と一緒に、早稲田大学の正規授業を受講できる制度である。早稲田大学では、全国の高校生のために、学問への関心や進路決定の手助けになるように、正規授業を高校生へ開放している。

附属校である本学院は、授業料を全額免除になるほか、取得した単位は大学での正規の単位として認定されるため、大学教育の先取りとなっている。

[受講期間] 9月下旬～1月（週1回90分）

[受講費用] 無料（実習を伴う科目は実習料が必要）

[受講場所] 早稲田大学各キャンパスまたはオンデマンド（受講科目による）

3.6.4 安全配慮義務プログラム

「安全配慮義務」の実践プログラムとして、2025年度は、運動部生徒と希望者を対象に以下の講座を開催した。

（ア）5月7日に競技スポーツガイダンス「早稲田大学本庄高等学院運動部員として」、「緊急時対応 AED 設置場所他」、「スポーツ傷害と栄養補給」について講習を実施した。

（イ）7月9日に中央消防署より講師を招き、救命講習（AED講習）を実施した。心肺蘇生法やAEDの実践講習において、生徒は熱心に受講し、バイスタンダーとして救助に関わる意識が高まり、良い機会となった。

（ウ）7月12日に熱中症対策講座を開催した。

3.7 生徒指導

3.7.1 生徒指導の方針

本庄キャンパスの豊かな自然環境で逞しい心身を養い、自由と自立の校風のなか、「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもと、「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを目指している。学院生活におけるルールについては、学院生の矜持や良識を信頼し自主的・自律的な行動を求めることから、いわゆる「校則」という言葉を使うことなく「心得」として提示している。

学院生がその本分にもとる行為があったときは、懲戒処分が付して指導を展開している。

3.7.2 2025年度の状況

生徒指導案件は数件あった。SNS の不適切な利用、交遊関係トラブルに起因する案件等である。来年度も、生徒指導案件を未然に防ぐために、日頃から生徒情報を教員間で共有し、保健室や相談室と連携して指導を進めていきたい。

4. 入学

4.1 入学試験

4.1.1 入学試験全般（志願者数、入学予定者数・出身地域別）

- 2024年3月に周知のうえ、2026年度新入生の募集定員を次のように変更した。
一般男子 約95名、一般女子 約95名、帰国男子 約10名、帰国女子 約10名、 α 選抜男子 約30名、 α 選抜女子 約30名、I 選抜 約20名
- 志願者総数は3,287名であった。全入試区分で男女とも増加した。一般・帰国生入試では、東京都・埼玉県・首都圏外で増加した一方、神奈川県および千葉県で減少した。
- 入学予定者は329名で、男子162名、女子167名である。
- I 選抜の志願者は102名で前年度比+12名、6年ぶりに3ケタ台となった。
- 学院説明会は7月・9月の2回、対面とオンラインの併用で開催した。
- 出身地域別の入学予定者数は下表のとおり。

| | 埼玉県 | 東京都 | 神奈川県 | 千葉県 | 群馬県 | 他道府県 | 海外 |
|-------|-------|-------|------|------|------|------|-------|
| 2025年 | 136 | 90 | 19 | 21 | 17 | 13 | 33 |
| 2026年 | 123 | 105 | 13 | 13 | 25 | 13 | 35 |
| | 37.3% | 31.9% | 4.0% | 4.0% | 7.6% | 4.0% | 10.6% |

4.1.2 広報・学校説明会

- 学院説明会は昨年度に引き続き対面とオンラインの併用方式で行い、遠方に住む受験生・保護者にも、本学院の情報にアクセスする機会を提供するよう努めた。
- 海外在住者対象の説明会を4月～8月の4日間、計6回実施した。学院長挨拶・説明、入試説明、学院生による紹介、校舎・キャンパス見学で構成した。
- 14会場15日間の外部説明会・相談会に参加し、講演および個別相談を行った。

4.1.3 入試実施体制

一般・帰国生入試の受験者数が高止まりしており、採点作業のさらなる効率化を図りたい。

4.1.4 入試区分別 志願者数、合格者数

(ア) 一般入学試験・帰国生入学試験

志願者数は一般2,671名、帰国生212名で、合格者は一般男子458名、一般女子235名、帰国生男子32名、帰国生女子26名となった。

(イ) α 選抜（自己推薦入試）

志願者数264名で、合格者は男子35名、女子35名となった。

(ウ) I 選抜（帰国生自己推薦入試）

志願者数102名で、合格者は24名となった。

4.1.5 指定校推薦

入学予定者数は、男子15名、女子23名となった。

4.2 入学決定者の集い

2月21日(土)に実施した。学院長はじめ教員からの挨拶、学院生による歓迎コンサート、模擬授業、校歌指導および応援部からのエールで構成した。

参加者アンケートでは、大多数の入学予定者から、本学院への期待が一層ふくらみ、探究的な学習への意欲が増したという回答を得た。

5. 生徒への配慮

5.1 奨学金

2025年度奨学金の状況は以下の通りである。

| 奨学金名 | 受給者数 |
|-----------------|------|
| 茂木本家教育募金 | 3 |
| 埼玉県高等学校等奨学金 | 7 |
| 東京都育英資金 | 1 |
| あしなが育英会 | 1 |
| 正覚会奨学金 | 1 |
| 公文公記念奨学金 | 1 |
| 弘済会奨学金 | 1 |
| オーケー育英財団奨学金 | 6 |
| 長島記念財団奨学金 | 4 |
| 吉岡奨学金 | 1 |
| 西澤育英奨学金 | 1 |
| 山田進太郎 D&I 財団奨学金 | 2 |
| 大隈記念 | 8 |
| 小野梓記念 | 13 |
| 早稲田カード | 3 |
| 早大生協給付 | 1 |
| 校友会給付 | 4 |
| 本庄高等学院 | 3 |

5.4.2 保健室

5.2.1 健康診断

生徒定期健康診断：4月17日（木）実施

1時間目から4時間目にかけて全学年実施した。欠席等の未受診者には後日実施し、全生徒が受診できた。

5.2.2 健康相談

内科（婦人科）、眼科、耳鼻咽喉科、歯科、整形外科の各校医等による個別健康相談を実施した。今後も生徒が積極的に相談できるよう、タイミングや周知の方法に工夫が必要である。

5.2.3 感染症対策

インフルエンザA型が10月から流行し始め、稲稜祭を経て大きな流行となり、学年閉鎖や一斉休校の措置をとった。3学期に入るとインフルエンザB型が流行したものの、学校全体で大きな流行になることはなかった。今期もインフルエンザの早い流行を見越し、寮生への予防接種（任意）時期を早めてはいたが、流行を抑止できたとは言い難い。一方、新型コロナウイルス感染症は、年間を通して感染が報告されているものの、大きく流行することはなかった。

前年度は学級閉鎖1クラスのみで大きな流行となることはなかったが、今年度はインフルエンザA型の大流行により学級閉鎖や学年閉鎖、一斉休校の措置をとることとなり、修学旅行、球技大会、文化祭等のイベント前後の感染拡大の防止については、引き続き課題である。イベント前から徹底した対策をする必要がある。

5.2.4 カウンセリング

週2回水曜土曜の午後に相談室を開室し、大学学生相談センター所属のカウンセラーが生徒や保護者、教職員の相談に対応している。例年、前期よりも後期の方が相談件数が増加する傾向にあり、今年度も12月以降の相談が増加した。12月以降は、成績の良し悪しに関わらず、進級に関して不安が強い生徒が利用している傾向にある。

5.3 リハビリコンディショニングルーム

運動部サポートの一環として、トレーナーによるスポーツ障害相談を実施した。個別の運動障害に対し丁寧にリハビリ・トレーニングを指示して成果を得た。次年度は定期的の実施し、多くの生徒が利用できるように努めたい。

5.4 日本スポーツ振興センター災害共済給付金

本学院では、学校管理下における生徒の災害に対し、日本スポーツ振興センターの制度を利用することで災害共済給付金の支給を行っている。日本スポーツ振興センターへの加入にあたっては、全生徒から年額 1,500 円を徴収し、本学院も生徒 1 人につき 665 円を負担している。

5.5 学校安全管理

5.5.1 安全管理体制

本学院のキャンパスは浅見山とよばれる丘陵地にあり、85万平方メートルにおよぶ広大な敷地を有している。古墳群が点在し、オオタカ等の野生生物保護のため、環境保全の必要にも迫られている。そのような特殊な事情により、学校を外部から物理的に遮蔽する塀や門を設けることができない。そのため、日直にあたる教員が校地を巡回し不審者の侵入防止・発見に努めるほか、下校時刻の遵守指導を行っている。

これに加えて、外部委託によるキャンパス管理室を設置し、24時間体制で巡回を行うなどセキュリティを強化している。キャンパス内外をつなぐ出入口や建物の開口部には防犯カメラを設置し、校舎にも最新の入退出管理機器を設置するなど監視体制も整えている。2023年度には不審者の侵入を防ぐために、約 2 kmにおよぶ柵を設置して、圍繞地化を行った。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第 19 条第 1 項に規定される安全衛生委員会が設置され、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

また、4月には消防署の協力により防災訓練を実施し、災害発生時の避難経路の確認、防災意識の高揚を図った。

5.5.2 交通安全指導

自転車による通学経路を指定し、指導を続けている。具体的には4月、9月、1月に早苗寮前、高崎線歩道橋南側ロータリー、稲稜ホール入口にて自転車走行の指導を行った。電車通学の生徒については、電車通勤の教員が中心となって生徒の乗車状況を確認し、ホーム上での危険防止（歩きスマホの指導）等にあたっている。ヘルメットの着用が努力義務化については本学院でも積極的な着用を呼び掛けた（原則は着用と指導）。

5.5.3 防災訓練

全校生徒・教職員を対象とした防災訓練を毎年実施している。2025年度は4月24日（木）に火災が起こったことを想定し、消防署の指導による消火訓練なども含め実施した。

6. 生徒の進路

6.1 進学学部

6.1.1 学部決定の方法

(ア) 総得点方式

成績の総得点上位者から順番に、希望の学部学科に推薦する。

得点の算出方法は、理系文系の履修科目数が異なるため、1科目の重みを考え公平になるよう平均点を算出する。その平均点に卒業論文の点数を加えたものが、生徒個々の得点となる。

(イ) 日本医科大学への推薦

推薦条件を満たした希望者から、成績や諸活動および意欲などを総合的に評価し推薦者 2

名を決定する。募集方法は以下のとおりである。

以下のすべての条件を満たす出願者の中から成績・志望理由書・面接をもとに本庄高等学院からの推薦生を決定した。

- (1) 第3学年において、理系科目を選択している者。加えて、選択「生物」を履修していることが望ましい。
- (2) 第1学年および第2学年の「合計欠席日数」が、原則としてそれぞれ10日未満の者。
- (3) 第3学年の1学期の「合計欠席日数」が、原則として4日未満の者。
- (4) 学業のみならず、他の分野でも活躍した実績のある者。
- (5) 日本医科大学が第一志望であり、志望理由が明確である者。
- (6) 日本医科大学に合格した場合、入学を確約できる者（入学を辞退することはできない）。
- (7) 卒業論文を執筆している者（卒論提出期間内に提出することが必須条件）。
- (8) 第1学年の学年成績および第2学年の学年成績および第3学年1学期の成績を合わせた平均点が80点以上であること。
- (9) 第1学年の学年成績および第2学年の学年成績および第3学年1学期の成績に不可科目がないこと。
- (10) 謹慎・停学の生徒指導歴がないこと。合格後に謹慎・停学になった場合は、合格を取り消すことがある。
- (11) 推薦入学の出願は、在学期間中1回のみ可能とする。

なお、2027年度進学者から最大3名を推薦で受け入れていただけることになった。それに伴い、上記推薦基準8を次のように変更することを本学院で決定した。

次のA)、B)の基準のいずれかを満たすこと：A) 第1学年の学年成績および第2学年の学年成績および第3学年1学期の成績を合わせた平均点（小数第一位を四捨五入）が79点以上であること B) 第1学年の学年成績および第2学年の学年成績および第3学年1学期の成績を合わせた平均点（小数第一位を四捨五入）が78点以上、かつ理数系科目*のそれぞれの学年成績（3年次科目は1学期成績）の平均点（小数第一位を四捨五入）が80点以上であること
*該当する科目は「数学Ⅰ」、「数学A」、「化学基礎」、「生物基礎」、「数学Ⅱ」、「数学B」、「物理基礎」、「地学基礎」、「数学Ⅲ」、「数学C」、「化学」、「物理」または「生物」の12科目

7. 教員の活動

7.1 教員の研究活動

7.1.1 特別研究期間

本校では毎年3名を上限に、最長1年間の特別研究期間（サバティカル）を取ることができる。本年度の希望者は1名であった。

7.1.2 研究紀要「教育と研究」

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載した研究紀要「教育と研究」を年1回刊行している。本度は研究紀要第44号を発行し、論文3本と退職教員1名の略歴・業績を掲載した。

- ・ 論文「パリにおけるジョセフィン・バトラの公娼制度廃止運動とジュネーブ国際会議」、三枝亮也
- ・ 論文「「水問題」を主題とした日韓高校生による国際学術交流プログラムの開発・実践と成果 ―グローバル・シティズンシップの育成に焦点を当てて―」、羽田真
- ・ 論文“Observing Learner Engagement in Language Classrooms: Insights from ESL, Spanish, and Japanese Courses”、Yoshio HOSO

7.1.3 教員の研究成果

【課題研究】

- ・ 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）2025C-631「パリにおけるジョセフィン・バトラーの公娼制度廃止運動」
- ・ 早稲田大学特定課題（アーリーキャリア支援）2025E-041「超幾何モチーフのレギュレーターに関する研究」
- ・ 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）2025C-262「高等学校「数学Ⅲ」における探究型授業の実現可能性の考察」
- ・ 早稲田大学特定課題 2025C-261「韓国における法教育の現状と課題」
- ・ 早稲田大学特定課題 2025R-056「社会科における法教育の日韓比較研究」
- ・ 早稲田大学特定課題（研究基盤形成）2025C-630「魏晋南北朝時代における西方非漢族勢力の勃興と国際交易路の変化に関する研究」

【論文】

- ・ 松田英里「名誉の負傷者」の社会復帰」北村陽子編『職業教育とジェンダーの比較社会史』、昭和堂、2025年
- ・ 林山まゆり「中世真言教学における『般若心経秘鍵』理解—「顕中之秘」の解釈をめぐって—」大久保良峻先生古稀記念論集刊行会『大久保良峻先生古稀記念論集 天台学と諸思想』、法蔵館、2025年
- ・ 上田太郎「子どもを生む技術とルール」、岩崎正洋編著『政治に正解はあるのか』、日本経済評論社、2025年
- ・ Yusuke Nemoto, Ken Sato, 「Construction of Higher Chow cycles on cyclic coverings of $P^1 \times P^1$, Part II」, arXiv: 2603.04888.
- ・ Yusuke Nemoto, Takuya Yamauchi, 「Regulators on some abelian coverings of P^1 minus $n+2$ points」, arXiv: 2512.24607.
- ・ Payman Eskandari, Kumar Murty, Yusuke Nemoto, 「Mixed motives and linear forms in the Catalan constant」, arXiv: 2510.20648.
- ・ Yusuke Nemoto, 「On special values of generalized p -adic hypergeometric functions of logarithmic type」, arXiv: 2509.07895.
- ・ Yusuke Nemoto, Ken Sato, 「Construction of Higher Chow cycles on cyclic coverings of $P^1 \times P^1$ 」, arXiv: 2509.05569.
- ・ Payman Eskandari, Yusuke Nemoto, 「The modified diagonal cycles of hypergeometric curves」, arXiv: 2508.06008.
- ・ Yusuke Nemoto, 「Transformation formula of Dwork's p -adic hypergeometric function」, Bulletin of the Australian Mathematical Society [査読あり].
- ・ 成瀬政光, 宮川健. 「高等学校における定積分の探究型授業の実践とその分析—教授人間学理論を抛り所にして—」. 日本科学教育学会誌『科学教育研究』, 第49巻, 第1号, pp. 20-39. 査読あり
- ・ Yoshio HOSO, 「From Grammar to Engagement: Research-Based Insights on It-clefts and Wh-clefts in the EFL Classroom」, WATESOL Newsletter Special Edition / Fall 2025 p. 13-15
- ・ 羽田真「「水問題」を主題とした日韓高校生による国際学術交流プログラムの開発・実践と成果—グローバル・シティズンシップの育成に焦点を当てて—」、早稲田大学本庄高等学院紀要『教育と研究』44号、14-38頁 2026年3月
- ・ 上牧瀬香「〈文アル×文学館〉の行方」、梅澤亜由美他編『「文豪とアルケミスト」を本気で考えてみた』、ひつじ書房、2025年11月

【口頭発表】

- ・ 太田洋平, 「On the quantum groupoid structure of the Heisenberg double of $U\hbar(\mathfrak{sl}_2^+)$, Poisson geometry and related topics 25, 立命館大学, 2025年11月29日-30日.
- ・ 太田洋平, 「On the quantum groupoid structure of the Heisenberg double of $U\hbar(\mathfrak{sl}_2^+)$, 神楽坂数理解物理・幾何セミナー, 東京理科大学, 2026年2月20日 [招待あり.]
- ・ 大塚未来「高校生による宇宙線のマルチメッセンジャー測定」日本物理学会第80回年次大会 2025年9月17日
- ・ 松田英里「戦後80年目の現代史教育—戦争体験に向き合うための模索」第20回歴史教科書シンポジウム、早稲田大学、2025年9月23日。
- ・ 根本 裕介, 「Regulators on some abelian coverings of P^1 minus $n+2$ points」, プロジェクト研究集会 2025, 石和ビューホテル, 2026年3月15日-17日[招待有り].
- ・ 根本 裕介, 「On the K_4 group of Fermat curves」, 数論・超幾何ワークショップ, 休暇村妙高, 2026年3月8日-11日[招待有り].
- ・ Yusuke Nemoto, 「Regulators on some abelian coverings of P^1 minus $n+2$ points」, Séminaire d'arithmétique à Lyon, ENS de Lyon, France, 2026年2月5日[招待有り].
- ・ Yusuke Nemoto, 「Transformation formula of Dwork's p -adic hypergeometric function」, Number theory and p -adic methods, 富山大学, 2025年11月22日-24日[ポスター発表].
- ・ 根本 裕介, 「Non-triviality of the modified diagonal cycles of hypergeometric functions」, 東北大学代数セミナー, 東北大学, 2025年11月20日[招待有り].
- ・ 根本 裕介, 「Non-triviality of the modified diagonal cycles of hypergeometric functions」, 千葉大学代数セミナー, 千葉大学, 2025年10月23日[招待有り].
- ・ Yusuke Nemoto, 「Non-torsion algebraic cycles on the Jacobians of Fermat quotients」, University of Toronto, GANITA seminar, Canada, 2025年6月19日[招待有り].
- ・ 根本 裕介, 「Dworkの p 進超幾何関数の変換公式について」, 新潟大学代数セミナー, 新潟大学, 2025年4月21日[招待有り].
- ・ 中村 純, 「大学附属高校における化学の課外授業の実践」, 日本化学会第106春季年会, 日本大学, 2026年3月19日[ポスター発表]
- ・ Yoshio HOSO, 「Towards the Development of a Teacher's Checklist to Enhance Learner Engagement」, University of Delaware ELI Workshop [招待有り], 2025年1月23日
- ・ 細 喜朗, 「授業実践の振り返りから考える エンゲージメントの可能性」, 橋架村塾, [招待有り], 2025年5月
- ・ 細 喜朗, 「学習者エンゲージメントが高い授業の特徴 —北米の語学授業における100時間以上の授業観察から—」, 言語教育エキスポ 2026, 2026年3月1日
- ・ 望月眞帆, 「プレゼンを強化する『論理・表現』授業」, 国際教育ナビセミナー, 対面・オンライン, 2025年9月6日
- ・ 影森徹 「ハルバツハ配列の磁石がモーターの回転に与える効果を検証する実験の一考察」, 日本物理教育学会第41回研究大会、2025年8月12日
- ・ 羽田真「日韓で考える水問題—国際ESD交流の実践について—」, 全国民主主義教育研究会埼玉支部例会 2025年8月23日
- ・ 峰雪幸人「クチャ市「友誼路魏晋墓に関する研究動向の基礎的整理と紹介」、内陸アジア出土古文献研究会7月例会 [招待あり] 2025年7月26日

7.3 社会活動

7.3.1 学会役員

- ・ 物理教育研究会 運営委員
- ・ 物理教育学会 編集委員

- ・ TALK（田辺英語教育研究会）研究企画委員長、紀要編集委員
- ・ 日本物理学会 運営委員
- ・ 唐代史研究会 幹事
- ・ 遼金西夏史研究会 幹事

7.3.2 学外委員

- ・ 本庄市行政不服審査会委員
- ・ さいたま市商業等振興審議会委員

7.3.3 学外講師・出張授業等

- ・ 共立女子大学 非常勤講師
- ・ 中央学院大学 非常勤講師
- ・ 共愛学園前橋国際大学 非常勤講師
- ・ 青山学院大学 非常勤講師
- ・ 実践女子大学 非常勤講師

7.3.4 教科書等の執筆

- ・ 「政治・経済」文部科学省検定教科書教師用指導書（教育図書）執筆者
- ・ 「わたしたちの地理総合 世界から日本へ」文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用（二宮書店）執筆者
- ・ 「わたしたちの地理総合 世界から日本へ」文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用 教師用指導書朱書き編（二宮書店）執筆者
- ・ 「情報Ⅰ」「情報Ⅱ」、高等学校情報科教科書、日本文教出版 執筆者
- ・ 「物理基礎」「物理」文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教科書 執筆者
- ・ 「物理基礎」「物理」文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教師用指導書執筆者
- ・ 「ENRICH LEARNING I・II・III」文部科学省検定教科書（東京書籍） 高等学校 コミュニケーション英語Ⅰ 編集協力者

7.3.5 外部資金の獲得

- ・ 科研費奨励研究 25H00169 「宇宙線ミュオンによる古墳の内部構造調査を題材とした学際探究活動の実践」
- ・ 日本学術振興会 科学研究費助成事業 奨励研究 JP25H00063「高等学校「数学Ⅲ」における探究型授業の実現可能性の検討」
- ・ 第6回東レ理科教育賞・企画賞「天然繊維を素材とする高分子化学の教材開発」
- ・ スガウエザリング技術振興財団 第3回高校生探究助成
- ・ 共生ホールディング 高校生研究活動助成

7.3.6 その他

- ・ こども大学本庄 学長

8. 教育研究施設

8.1 学内施設

8.1.1 教室

教室は普通教室 23、ゼミ室4、理科実験・講義室 5、情報処理室2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室 1、大教室1 で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

8.1.2 稲稜ホール

稲稜ホールは約400席のキャパシティを持ち、学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会の会場として利用される。その他、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、稲稜祭をはじめとするイベント、演劇部・軽音楽部等の公演会場として常時利用される。また、学外の機関の利用にも供している。

上記を含め年間の施設利用回数は、2023年度は100回を超えており、本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしている。

8.1.3 CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会や始業前30分間の「英語朝練（チュートリアル）」、各種ワークショップにも活用されている。

8.1.4 コンピュータ・インターネット環境

PC室2室（46名対応）で多様な授業や課外活動を展開している。PC室は教科「情報」、情報系の選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室にLANの情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内すべての場所でWIFIが使用でき、すべての教室に情報コンセントが設置されている。生徒も常時、ノートPCやタブレット、スマホ等でインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノートPCやタブレットを持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てている。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

将来的にはPC室は、コンピューターをすべて取り外し、グループ学習などに使用できる多目的ホールに改修の予定である。これに伴い、現在BYOD(BringYour Own Device)に完全移行を済ませている。

8.1.5 体育館

バスケットコート2面のメインアリーナと、ダンスや卓球、県道などができる多目的ホールやランニングトラックと、部室やトレーニング室、シャワールームが併設された施設である。冷暖房も完備されたため、より一層充実した授業や部活が実施できている。雨天時も3クラス同時展開が可能のため代替種目の実施も可能となった。また、WiFiを活用して映像を見ながらの授業展開が可能となった。

8.1.6 共通教室棟体育館

主に雨天時の体育や、水・土曜日の部活動で使用申請を行い、活用している。

8.1.7 サッカー場

サッカーコート1面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーの授業展開が可能である。授業や球技大会等の行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。

8.1.8 ラグビー兼陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。400m 6レーンの充実したトラックに加え、幅跳び用ピット、高跳び用マット、投擲用サークルと他種目に取り組みする充実した環境である。

8.1.9 野球場

野球部の活動以外では、授業での使用頻度も高い。主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。外野は天然芝で両翼 100m の大きな球場は、大雨の時には貯水池になる。

8.1.10 テニスコート

テニスコート 6 面（クレー 4 面・砂入り人工芝 2 面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

8.1.11 図書室

図書室を頻繁に利用する生徒は少しずつ増えていると思われるが、より多くの生徒に図書室を有効活用してもらえるよう、本学院図書委員会編「図書だより」（年 1 回発行）で生徒によって紹介された図書を特設コーナーを設けて展示紹介している。

今後も学内関係箇所と連携しつつ、所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

8.1.12 食堂

食堂はホールとパンショップ（購買）から構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。座席数は、約 400 席。4 人掛け、6 人掛けの他に、1 人掛けのテーブルも用意し、多様なニーズにこたえるように改善した。

また、生協のご厚意で、生協会員には食事代の割引や、書籍の割引サービスがある。

食事の時間外では学年集会や研修会、部活動保護者会などで使用されている。今年度は、台中一中来校交流会場として活用したほか、「大久保山学」「コミュニケーション英語Ⅲ」の授業内活動（ポスターセッション）でも使用した。

8.2 スクールバス

6 台で運行シフトを作っている。朝の本庄発バスが込み合う時間帯は台数も多く手配しているため、バスに乗り切れない生徒はほとんど見られなかった。

一方で、朝、通学時に座りたい生徒がバスを見送り、バス停が先頭から詰まってしまうケースが見られたことや、最終下校時刻のバスで、バスの出発時間を過ぎてからも乗ろうとする生徒が見られることへの対策が課題である。

また、寄居駅行のバスは、本数が少なく、かつ複数の電車の路線（東武東上線、JR 八高線、秩父線）が集まるため、希望する時間の電車に乗れるようなバスダイヤを組むことが難しく、生徒から複数件相談があった。

8.3 生徒寮

今年度は担当事務職員のご尽力で、保護者からの外泊や門限延長などの諸届がオンラインでできるようになった。付随して、寮主任・教務・組主任と寮生保護者間のメールでのやりとりがしやすくなった。

2 学期の保護者会の前には両寮長と関係教職員での懇談会を行い、その内容を受けて年度末で退寮する寮生に事前に「引っ越し時の注意」を周知した。これにより、廃棄物放置などのトラブルを減らすことができた。

8.3.1 早苗寮

今年度は、1 学期に新入生歓迎会、2 学期にクリスマス会と、2 度の寮行事を開催することができた。学年を越えた生徒同士の交流を通してコミュニケーションが活発になり、日常生活の中で生じる問題や課題の解決につながる良い機会となった。

また、1 月には韓国ハナ高校からの短期留学生 3 名を受け入れ、特にバディとなった寮生にとっては貴重な経験となった。

門限や食事時間については概ね遵守できるようになってきたが、ゴミの分別に対する認識が十分でない寮生も見られる。そのため、教員からの指導に頼るだけでなく、自治会を中心とした自主的・自立的な取り組みが求められる。今後もこの点のさらなる成長を促していきたい。

8.3.2 梓寮

本年度は1年生寮生40名が入寮し、寮生数は最大となった。教員の巡回時の面談や学習指導のしやすさを考えて、食堂内に面談スペースを設置した。

留学生は1学期は1名、2学期は新規に3名（台湾から1名、中国から1名、タイから1名）が寮生として1年間または3ヶ月生活した。1月には韓国の中津高校から短期留学生3名の1週間の受け入れを行った。通年で留学生と生活が共にできることは、梓寮の魅力の1つになっている。

自治会行事としては、7月に留学生送別会兼「ドーナツパーティ」、9月に花火大会（7月の予定を雨天により延期）、12月にクリスマス会を行い、寮生同士の交流をしていた。4月の新入生入寮ガイダンスや留学生の滞在時は、世話役やバディの募集に有志寮生が必ず名乗り出る気風が心強い。

寮生数が増えたことで生活の中での小さな「異文化摩擦」の頻度が増えた体感がある。自治会リーダーを中心に寮内の課題の解決法を自発的に模索するよう、継続して支援していきたい。

9. 学外との協力・連携

9.1 保護者との連携（保護者の会）

本学院では保護者会を年に2度実施している。第1回目は6月初旬の土曜日放課後に開催する。1年間の学習や行事に対する諸注意、保護者会幹事選出が内容の基本である。第2回目は12月の冬季休業に入った最初の日曜日に実施する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が行われる。

また保護者による組織として、「保護者の会」がある。PTAとの違いは、保護者の会は、教員がその動きには基本的には関わらずに、会独自に活動していることである。保護者の会の活動は、保護者向けの広報誌の作成や卒業式関連のイベントの実施、また保護者同士の親睦を深めるための企画・実施等である。

新1年生に保護者会の活動内容を伝え、幹事選出をスムーズに行うため、保護者会が独自に入学式後4月中旬を目処にオンラインによる1年生保護者対象の説明会を開催している。

9.2 卒業生との連携（同窓会・キャリア教育）

稲稜祭における出展や記念品グッズ作成、卒業生への就職セミナーを実施した。

卒業生との連携としてはキャリア教育の充実が上げられる。およそ月1度土曜日放課後に実施しているキャリアデザイン講座、毎年9月の2週に渡って実施するキャリアウィークでは、各界で活躍しているOB/OGを講師として招き、職業について講義をしてもらっている。OB/OGにお願いする利点は、高校生活・大学生活が本校生徒と共通するため、どのような高校・大学生活を送り、どのように職業選択を行ったのかという時系列を自分のこととしてイメージしやすいことがあげられる。

9.3 地域との連携、貢献活動

本庄学院は1982年の開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに対して講習会や特別講義を実施してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室ができてからは、連携を行い多様な講座を地域に公開している。

地域小学校への総合学習・国際教育支援

2018年度より、教育委員会・(財)本庄国際リサーチパークと連携し本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが開始した。大きく一般的な授業内容を展開する総合学習支援プログラムと、留学生を軸に英語・国際理解活動を展開する国際理解支援プログラムに分かれる。

学校が学校だけで閉じている時代は終わり、多様化・グローバル化の時代の中、学校は教育リソースを学外に求めより効果的で高いレベルの教育を目指すとともに、地域の文化的拠点にならなくてはならないと考えている。

本年度は、藤田小学校で紙の橋の耐久コンテストの出前講義、他市内5つの小学校で実施総合学習支援授業・国際教育支援授業を開催した。国際教育支援授業では基本的に本庄学院で学ぶ留学生が講師を務める。講師や通訳を本学院生が努めていることが特徴である。遠距離通学生とスクールバス通学生が多い学院生にとって、ともすると駅と学校の間だけの登校になり学校がある地域を知らずに卒業してしまいがちな中、貴重な地域交流の機会になっている。

本庄市への協力

生涯教育を目的とした本庄市が主催する市民総合大学、こども大学ほんじょうにも講師・学長の立場で協力をしている。2025年度は市民総合大学に3講座、こども大学に3講座協力した。

また本庄市役所が主催し、本庄市内7つの高校生を集めて実施している年間活動である七高祭でも学院生が活躍している。「七校祭」とは2008年に実施された「セブンハイスクールサミット2008」に端を発する。本庄市内高校等に通う生徒たちが、若者の目線から本庄市の魅力を再発見し、発信する試みで、本庄市のバックアップの元で推進されている。コロナ禍を挟みながらもこの間ずっと活動が継続されており、2024年には令和6年全国広報コンクールで「総務大臣賞・特選」を受賞している。2月15日（日）市内カミケンシルクドームにて、今年度七校祭活動の成果報告である「七高祭」合同文化祭が開催された。



合同文化祭における学院生

学校独自のプログラム

本庄学院主催の子ども科学教室と英語教室 Waseda English Kids を行っている。従来は小学生親子対象であったが、昨年度から入試広報戦略の意味を持たせ、募集対象を地域に限定せず、年齢を中学生まで拡大している。広く海外や近畿からの参加者もいた。

特に～に実施した中学生向け Waseda English Kids は小学生向けと異なり目的をもたせることを考え、「本庄市内にバナナカフェを作ろう」というテーマで起業の要素を取り入れた。実施前日の7月12日（土）には、本庄市の協力を得て、課題におけるリノベーションの対象とする空き家の見学を行った。English Kids 当日は日本政策金融公庫から起業について中学生向けに説明してもらうという、入れ込んだプログラムとなった。



班ごとの成果発表の様子

河川研究班の活動

河川研究班は2009年より、本庄市内河川環境保護の活動をしている、本学院の有志団体である。2012年からは、同じような活動をしている市内藤田小学校と連携し、年2回の河川調査と総合学習における科学教育指導、河川環境に対する啓蒙活動として3月に市民を対象として川のシンポジウムを開催している。

9.4 早稲田大学・附属校・系属校との連携

9.4.1 Waseda Affiliated Schools` Summit (WASS) の活動

2020年より早稲田大学のもう一つの附属校である早稲田大学高等学院有志との間でWASSの活動を行っている。この活動は、当初コロナ禍で全く学校活動ができない中、「何か両学院間でやれることを作ろう」と有志がオンラインで相談したことに端を発する。現在では、両学院有志10名ほどが「より充実した学院生活」作りの案内をすることを目標としている。具体的には、大学教務部高大接続課の協力のもと、早稲田大学キャンパスツアー、早稲田祭におけるOBOGを招いてのトークセッション、そしてより充実した学院生活作りに向けたワークショップを大学本部で3月中旬に実施している。

今年度は、系属校も含めて広く附属・系属校のプロジェクトにしたいと考えて活動し、3月22日(日)の午後に開催したワークショップは両高等学院・早稲田実業・早稲田大阪・早稲田佐賀・早稲田渋谷シンガポールの付属系統校5校が参加する盛大なものとなった。



3月のワークショップにおける、最後の集合写真

9.4.2アントレプレナーシップ育成事業

早稲田大学アントレプレナーシップセンターでは、学生の起業家精神を涵養し、イノベーションを生み出す人材を輩出する教育に取り組んでいる。本庄高等学院においても、今年度は日本政策金融公庫の協力を得ながら、高校生がアントレプレナーシップを身に付けるためのプログラムを広げた。

9.4.3 オンラインによる国際部との連携講座「留学のススメ」

2018年度より大学国際部との連携で、特に大学進学後における留学への理解を進めるべく、特別講座を実施している。オンラインであれば保護者の参加も可能であり、対面とは異なる効果があることを感じている。本学院学務係から「高校における留学」、国際部国際課から「大学における留学」の説明を行ったのち、本学院のOBOGによる留学報告とパネルディスカッションを行い、最後に質疑をするという形式である。2025年度は6月10日（火）19時～20時に実施し、生徒保護者合わせて130名が参加した。

9.4.4 本庄早稲田の杜ミュージアムとの連携プログラム

2025年4月23日（水）に本庄早稲田の杜ミュージアムの学芸員太田氏の協力のもと、キャンパス内での古墳巡見「2025年度 第一回 本庄の古墳を巡ろう！」を実施した。本庄キャンパス内にある前山一号墳古墳（前方後円墳）、東谷古墳（円墳）をご案内いただき、実際の古墳を見ながら古墳時代の埋葬を中心に学んだ。生徒たちからは様々な側面から考古学や歴史についての質問があり、考古学を体験する機会となった。

<https://www.waseda.jp/school/honjo/news/6963>



東谷古墳の巡見

9.4.5 大学への研究協力

2025年度は、早稲田大学をはじめとするさまざまな箇所から依頼された5件の研究調査に協力した。

- (1) ファジィ理論を用いた教材構造分析や受講者のニーズ分析（早稲田大学大学院教育学研究科）
- (2) 高校生におけるスポーツ歴と体力、自己効力感との関係（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科）
- (3) 英語スコアレポートの活用方法に関する調査（早稲田大学大学院教育学研究科）
- (4) 数学的問題解決における含意利用の様相の解明（筑波大学大学院人間総合科学学術院）
- (5) 学習者の動機づけ傾向に関する長期調査（早稲田大学大学院教育学研究科）

調査を依頼する研究室は、その調査方法・データの扱い・倫理審査の結果などの詳細を本学院へ申し出る。教諭会ではこれらの内容をもとに調査を承認する。調査は生徒のプライバシー等に配慮され、得られたデータはしかるべき措置をとり、当該研究室に保管される。

こうした研究調査への協力は、本学院の教員にとって、最新の教育学や調査手法の知見を得る機会の一つになっている。

9.5 企業との連携

本庄学院では企業との連携プログラムを推進している。インターンシップにつながることで、学校で学んだ基礎知識を現場で実践する際の困難を経験することを期待している。

2023年度より開始したJAひびきのとの連携プログラムであるが、2025年度はJAとの交渉を密にし、以下の活動を進めた。

- ・ JAとの対面での会議
- ・ 農園の訪問（梨・サツマイモ）
- ・ 直売所の訪問
- ・ 実際に野菜を使った調理体験
- ・ ポップ・ポスターの作成

9.6 募金

2025年度（2025年4月1日～2026年2月28日時点）の教育支援募金寄付件数は47件、寄付金額は8,458,000円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を79件、5,370,248円を受け入れた。

今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

10. 管理運営

10.1 教員

10.1.1 教諭会

定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が16回開催された。臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれている。

10.1.2 各種研修

教員には各種研修が義務付けられている。

情報セキュリティセミナー・ハラスメント防止セミナー・学術研究倫理セミナー・ダイバーシティ&インクルージョンセミナーをまとめた教職員セルフマネジメントセミナーはオンライン上で試験の形で、全問正解の合格が義務付けられている。

2024年4月にハラスメント防止研修会を非常勤講師ガイダンスと同日開催、専任以外の教員も含め、ハラスメント防止等について再認識した。

10.2 委員会

各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。一人の教員が2委員会を兼ねることが原則となっている。

- ・ 教科主任（国語、地歴公民、数学、理科、英語、保健体育、情報・芸術・家庭科グループ）、**学年主任**、寮主任は1委員会でも可。他の教員は原則として2委員会に属する。
- ・ 寮委員会は、主任以外はカウントしない。
- ・ 広報・出版は1名。

業務内容は、研究紀要「教育と研究」発行業務と50周年記念誌の編纂業務の2点とする。50周年記念誌は2022年度内に完成させる。

- ・ 学校評価は教務・学院長の担当とする
- ・ 図書委員会は司書教諭1名

【委員会の主な業務】

○教科主任会（8名+教務+職員）

定期的に教諭会で協議すべき議案を審議し、それぞれの科に持ち帰り、科からの意見

を集約し、教務主任に報告する。

○学年主任会（3名+養護教諭+教務）

定期的に学年間の情報交換をする。3年間の生徒育成について意見交換する。奨学生審査委員会を兼ねる。

○生徒活動支援委員会（8名+教務+職員）

生活指導、交通指導、稲稜祭運営、人権教育講演会運営、いじめ防止委員会を兼ねる。

※生徒指導案件が発生した場合、必要に応じて当該学年の学年主任は委員会へ出席する。

○安全委員会（7名+教務+職員）

体育行事の運営、安全配慮、講習の補助（AED講習、熱中症対策講習など）

○寮委員会（寮主任、組主任外+教務+職員）

寮生の生活指導、寮への意見集約、寮行事の指導

○入試委員会（入試担当教務主任+7名+教務+職員）

広報（説明会・相談会）、入試制度検討、アドミッションズ会議出席、入試業務全般

○教学支援委員会（2名+教務+職員）

授業時間割の検討・調整、成績の分析、FD（Faculty Development）活動

○進路指導委員会（6名+教務+職員） ※各学年から最低1名を選出

各種セミナー運営、キャリアガイダンスの運営、卒論発表会運営

○留学・海外交流委員会（8名+教務+職員）

海外からの訪問者への対応、短期留学の企画運営、AFS や日台交流協会等への対応、国際学術交流会の運営

○広報出版委員会（1名+教務+職員）

紀要および50周年記念誌の原稿の集約・発行

○学校評価運営委員会（学院長+教務+職員）

○私学サミット準備委員会（10名（各教科グループから1名以上）、教務、職員）

| 委員会 | 構成 | メンバー |
|---|--------------|----------------------------|
| 教科主任会 委員長：教務担当教務主任 | 教員8、教務2、職員3 | 教科主任、教務担当教務、事務長、職員 |
| 学年主任会（奨学生、生徒表彰選考） *委員長：教務 | 教員3、教務1、職員1 | 学年主任、生徒担当教務、養護教諭、事務長 |
| 生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会兼務）*委員長：教務以外 | 教員8、教務2、職員1 | 各学年2、組主任外3、生徒担当教務、職員 |
| 安全委員会（体育行事、保健、その他安全配慮） *委員長：教務以外 | 教員8、教務1、職員1 | 体育5、養護1、全教科3、生徒担当教務、職員 |
| 寮委員会*委員長：寮主任 | 組主任外、教務2、職員1 | 組主任外 養護教諭1、寮主任2、生徒担当教務2、職員 |
| 広報・出版委員会（杜・紀要）*委員長：教務 | 教員 1、教務1、職員1 | <u>全教科1</u> 、教務1、職員 |
| ●入試委員会 *委員長：入試主任 | 教員8、教務1、職員2 | 全教科1、入試主任、教務担当教務、職員 |
| 進路指導委員会（各種セミナー、卒論報告会） | 教員8、教務1、職員1 | 各学年2、組主任外3、教務担当2、職員 |

| | | |
|----------------------------|----------------|----------------------|
| * ● 委員長：教務以外 | | |
| ● 留学・海外交流委員会 * 委員長：教務以外 | 教員 8、教務 1、職員 2 | 全教科 1、英語 1、教務担当教務、職員 |
| 図書委員会 | 教員 1、教務 1、職員 1 | 司書教諭 1、職員 |
| 学校評価運営委員会 * 委員長：教務以外 | 学院長、教務、職員 1 | 学院長、事務長 |

※ ● は 2 年継続

10.3 教科別教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。

| 教科 | 専任教諭 | 非常勤講師 | 合計 |
|----------|------|-------|-----|
| 国語科 | 6 | 4 | 10 |
| 地理歴史・公民科 | 7 | 15 | 22 |
| 理科 | 5 | 9 | 14 |
| 数学科 | 7 | 4 | 11 |
| 保健体育科 | 5 | 5 | 10 |
| 芸術科 | 2 | 1 | 3 |
| 英語科 | 8 | 9 | 17 |
| 情報科 | 1 | 1 | 2 |
| 家庭科 | 1 | 1 | 2 |
| 第二外国語 | 0 | 4 | 4 |
| 養護 | 1 | 0 | 1 |
| 合計 | 42 | 59 | 101 |

10.4 持ち時間数

24 年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。22 年度から大きな変動はない。

1. 専任教員 14.2 時間（除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭）
2. 役職者以外 15.1 時間
3. 役職者（教務） 8.2 時間
4. 非常勤講師 5.5 時間

10.5 教員構成

10.5.1 年齢別構成

| 資格 | 人数 | 21～30 歳 | | 31～40 歳 | | 41～50 歳 | | 51～60 歳 | | 61～70 歳 | |
|-------|-----|---------|-----|---------|-----|---------|-----|---------|-----|---------|-----|
| | | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 人数 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 専任教諭 | 42 | 0 | 0% | 10 | 21% | 17 | 40% | 6 | 14% | 10 | 24% |
| 非常勤講師 | 59 | 29 | 49% | 2 | 3% | 6 | 10% | 12 | 20% | 9 | 17% |
| 全体 | 101 | 29 | 29% | 11 | 11% | 23 | 23% | 18 | 18% | 20 | 20% |

10.5.2 男女別構成

| 資格 | 人数 | 男 | | 女 | |
|-------|----|----|-----|----|-----|
| | | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 専任教諭 | 43 | 32 | 76% | 11 | 24% |
| 非常勤講師 | 56 | 39 | 71% | 17 | 29% |
| 全体 | 99 | 71 | 73% | 27 | 27% |

10.6 事務組織

事務所には、事務長の他、庶務係に専任職員3名、派遣社員2名が、学務係に専任職員2名、嘱託職員1名、派遣社員2名が配置されている。他に、理科室に実験助手（嘱託）2名がいる。

専任および嘱託職員の嘱任、解任、配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては大学が契約窓口となり、人材サービス会社から派遣されている。

なお、施設の管理、スクールバスの運行管理、図書室の運営については業務委託を行なっている。

10.7 生徒の出欠席・成績処理

今年度より、生徒の出欠席・成績管理のためにモチベーションワークス社が開発した教務システム「BLEND」を導入した。2024年度まで導入していた「School N@vi」と同様に、ユーザーインターフェイスには Web ブラウザを採用している。このことは操作性や利便性の向上に寄与している。最も利便性が高くなった点は、保護者と本学院との連絡が簡便になったことである。保護者による欠席・遅刻連絡、本庄学院からの連絡はこれまで別々に対応していたが、BLEND を用いてこれらを一元化できた。保護者には BLEND にアクセスするためのアカウントを個別に配布した。一方で、これまでのシステムとは異なる点が多く、本庄学院の出欠席や成績に関する取り決めとシステム上の運用とをどのようにすり合わせるかが課題となった。今年度はその調整を繰り返し、運用方法を確立することができた。今後も教職員の希望を取り入れながら、システム改善へ取り組む。

具体的な運用は以下の通りである。

- (ア) 出欠席管理：科目担当者が各時限の出欠席を入力する。組主任は各日の「1日の出欠」を入力する。学期末には、組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。保護者は BLEND の機能を用いて、欠席・遅刻の連絡をすることができる。入力された結果はすべての教職員が閲覧することができる。
- (イ) 成績管理：学期末に科目担当者が生徒の成績を入力する。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。また、保護者は BLEND を通じて成績個票をデータで見ることができる。そのため、今年度から生徒への紙媒体による配布は継続しつつも、保護者への成績個票の郵送は廃止した。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

10.8 教育実習

今年度は、2週間（5月26日（月）～6月5日（木））で1名、3週間（5月26日（月）～6月11日（水））で3名、2週間（9月16日（火）～9月27日（土））で1名、計5名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせは4月24日（木）に実施した。本学院の教育実習の受け入れは原則春（5～6月）のみである。秋の受け入れを実施したのは、当該実習生が大学の留学プログラムにより春の期間に不在であったためである。秋の受け入れは、受け入れ教科および教諭会での承認を経て特別に認められた。

実習生は授業見学・教壇実習をしつつ、行事の運営・HR での指導など、学校現場の業務を実習した。実習期間中には体育祭や学年行事（3年生向け進学セミナー等）といった学校行事運営の実習をした。教育実習の反省会は2週間および3週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

10.9 広報・連絡

10.9.1 学校活動の広報

広報誌として『緑風』を年2回、本庄高等学院が、『杜』を保護者の会が年1回発行している。

『緑風』は、6月と12月に発行している。紙面は教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。

また、『杜』は、保護者向け広報誌である。保護者会広報担当委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

オンラインでの広報は、学院ウェブサイト (<https://waseda-honjo.jp/>) を主なツールとして使

用している。ウェブサイトでは、学院生活に関するニュースや出来事を継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行っている。

課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自の Web サイトがある公認団体（クラブ）は、団体独自の情報発信を行なっている。

今やウェブサイトは、学外の方に学校の基本的な情報、必要な手続・書式を得てもらう必須のツールとなっている。入試についても例外ではなく、本学院では、入試の出願、合格発表、入学手続きの全てをウェブサイトを使用して実施している。特に、今年度からは、これまで期間限定公開としていたオンライン説明会サイト（本学院の特徴や入試情報を動画コンテンツで紹介）を長期間にわたり一般公開するよう取り扱いを変更したことで、幅広い受験者層に広報のはたらきかけが可能になったと考えている。

正確かつわかりやすい情報発信はウェブサイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりは今後も継続的に検討していく必要がある。ウェブサイトの頻繁な更新が課題となっている。

10.9.2 保護者・生徒への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、2025年度に生徒の成績・出欠・学校業務管理システムBLENDシステムを導入した。保護者のメールアドレスを登録し、このシステムを利用して、災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡や成績表送付にも用いることで、保護者への迅速で紙媒体の郵送を用いない情報発信を行なっている。紙媒体の郵送やFAXは送り先を間違えるなどの人為的トラブルの可能性があるため、望ましいスタイルと言える。

生徒に向けての連絡は、通常はLHRや授業時に行うことで問題ないが、警報発令時の連絡、台風通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などは早稲田大学の授業用プラットフォームである、ラーニングマネジメントシステムWaseda Moodleを使って発信・連絡している。

10.9.3 学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

- ・ 警察・消防署・本庄市からの情報不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。
- ・ 市民・公共交通機関利用者等からの情報市民の方、電車の乗客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えるとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するように努めている。

11. 学校評価

この学校自己評価については、項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。保護者に向けたアンケートは実施できなかったが、学校運営に対する意見・感想を伺う場を保護者会のあとに役員から聴取することができた。

11.1 2025年度学校評価関係者評価会記録

11.1.1 概要

(ア) 日時：2026年5月9日（土）14:00～16:00

(イ) 場所：本庄高等学院応接室

(ウ) 参加者：

半田学院長

棚橋生徒担当教務主任

小林清木（元花咲徳栄高校校長）

武藤知啓（深谷市立花園小学校教頭）
山本倫儀（2025年度保護者の会会長）
田中健大（本庄プロジェクト推進室課長）
進藤卓（事務長）
高澤信一（職員）

11.1.2 学校関係者評価・第三者評価

【実施方法】

- ・ 学校自己評価報告書については委員に事前配布し、一読してもらっている。
- ・ 時間も限られており、学院長から「アドバイスいただきたい項目」を挙げる形で議事を進行した。
- ・ 紙面の都合上、本議事録には学院からの概要の説明は記載せず、質疑応答に関してのみ記載する。

アドバイスをいただきたい項目

【入試戦略について】

- ・ 志願者は増えているが、一般女子は歩留まりが高いが男子は比べて低い。女子は早慶の併願できる学校が少ないことが理由である。男子が地理的なハンデや女子に比べて早慶のライバル校が多いためと考えられる。
- ・ 群馬や長野の受験生を獲得するために稲門会でPRの時間を作ってもらった。
- ・ 女子の入寮率が低い。入学後に抜けるケースも多い。
- ・ 入学後の生徒の学校に対する満足度は高いと思う。自然環境、施設の充実。個人的には不満点は無い。
- ・ 現状でも十分いい生徒が集まっているのではないか。
- ・ グラウンドの人工芝化が志願者増にもつながるのでは。
- ・ 人工芝化は受験生獲得に有益であることを実感している。都内では人工芝化が当たり前。
- ・ 人工芝化したほうが有利ではある。
- ・ 火傷など人工芝のデメリットもあると思う。土のグラウンドのメリットも訴えていくという方法もある。
- ・ 人工芝の技術も進んでいるので昔のようなデメリットは少ない。
- ・ 泥汚れ、洗濯、雨天時の対応などのメリットが大きい。
- ・ 私が校長をした私学は、当時は土だった。そこにお金をかけるだけのメリットがどのくらいあるか。
- ・ 生徒募集の視点で言うと、どういう層をターゲットにするかが問題になる。
- ・ ほとんどの有名私学は、中高一貫のため、小学校卒業時の成績で入学。
- ・ どこから情報を得て、どういう層を獲るかの戦略を立てる必要がある。
- ・ 予備校や塾などはエビデンスをもっているもので、そちらとの連携取組を行う必要もあるのでは。
- ・ 本庄学院は高校から受け入れるというメリットがある。中学校で目覚める子たちを受け入れられる。
- ・ 塾の力は強い。都内に近い子のほうが塾で訓練されている印象がある。埼玉北部、地方の子は入学後最初苦労している印象がある。一般生の中には、最初は成績がよいが、だんだん中学時の財産が使えなくなってくる子がいる。
- ・ 一般受験では都内、埼玉県南の子が多い。
- ・ 塾でもまれていない子の中で、粘り強く頑張れる子は伸びてくる。
- ・ 本庄学院の最初の授業はわかっている前提で進むので、塾でやってこなかった生徒は苦労している。
- ・ その塾出身者の率は非常に高いことは認識している。早慶、国立等、それぞれの高校に特化したカリキュラムになっているのだと思う。
- ・ 自己推薦で地域枠を設けることは考えていないのか。

- ・ 提案されたことはあったが会議で反対があった。地方会場での入試を行ったことはあるが、受験生が集まらなかった。
- ・ 都内、県南の子たちは学院や他の私立に受かると地理的条件の良いところに流れるのは分かる。分かりやすい学校の雰囲気としてスポーツにもう少し力をいれるという方法もあるのではないか（人工芝化もその一つ）。スポーツに限らず何か特徴があると生徒が集まり、学力も上がる。似たような附属系属との差別化を進めるには何か特徴を出す必要がある。
- ・ 受験生のエリア拡大については、入試制度を変えない限りは単にPRするエリアを広げても効果は期待できない。都内の塾に通っている子には一般入試ではなかなかかなわない。受験に対する考え方が地方と首都圏は違う。
- ・ 青森、新潟など少しだが毎年新入生が来る地域があり、その生徒たちは学校生活においても積極的である。
- ・ 一般入試以外の学力でふりを掛けられている子は落ちこぼれない。
- ・ 田舎の子は入学後に延びるという印象を持っている。田舎の子を排除するのはもったいない。追いつくまでには時間が掛かるが。
- ・ 報告書の中にどのように広報につなげていくかの記載がない。例えば、この子が来たらこういう人間になりますよとワンフレーズで発信していくことが必要ではないか。
- ・ 地元の有力な塾にアプローチをしたらどうか。
- ・ 実際に地方の塾主催の説明会に参加したことがあったが、あまりに質問に来た中学の先生方のスタンスが違いすぎて驚いた。
- ・ 個人経営の塾長を集めて説明会をする等、そういう人たちを取り込むという方法が有効である。

【学校の魅力づくり・保護者との良好な関係作りについて】

- ・ 自分を律することができる子が多く、多様性を認める雰囲気があるので本庄学院は生徒にとって過ごしやすいと思う。
- ・ 保護者の会では親が楽しめる雰囲気と環境がある。
- ・ 自分が在校時は行動力ある人がたくさんいるという印象だったが、今はとても丁寧に教育している印象がある。
- ・ 率直に言って魅力が多い。プログラムがきわめて豊富。多様性、自分で取捨選択できる。敢えて言うと、ついていけない子たちへのフォローをどうされているかを教えてほしい、特に寮生について。
- ・ やりがいを見つけることができずに苦しんでいる子はいらる。人海戦術でひとりひとりにあたってケアしている。
- ・ トップランナーだけではなく、下層部へのフォローが手厚いという部分をアピールするとことも魅力のPRになる。
- ・ 生徒指導の際の先生方の対応がきめ細かく優しい。ただし、物理的に専任教員の人数が少ない。マンパワー不足という問題がある。大学に訴えても定員が増えない。
- ・ 生徒と向き合った際の教員方のパワーには自信がある。生徒への愛が強い。
- ・ 一般入試で面接を無くしたところ、中学校の長期欠席者の受験が増えた。調査書に欠席日数や所見を書かない県も増えており、そもそも中学時の生活状況が見えにくくなってきている。中学時は学校に通えなくても、本庄学院入学後には普通に通えている事例がほとんどである。本学のいいところがここにも現れていると思っている。
- ・ 保護者との付き合いに距離を置く教員もいる。
- ・ 保護者のクレームも専門化・鮮鋭化している。コロナ禍以降それが目立つ。
- ・ どういう意図で保護者との関係をここで取り上げたのか？
- ・ 現実的な側面としては、寄付を増やしたいということがある。体育祭を参観したいという声がある。授業参観したいという声もあったが、教室のスペースなど物理的に難しいため、本校教員に寄る保護者向け課外講義を行うことなど、保護者サービスを進めてきた経緯がある。保護者からの率直な意見を伺う場、例えばオンラインでもいいので学院長に物申す場を作りたいという思いもある。

- ・ 高校で授業参観やっているところはないのでは。
- ・ 体育祭を開放してほしいという要望は多い。
- ・ 一般の高校では、PTA 総会をやっても保護者の参加率が悪い。そのため、午前中授業参観、午後から PTA 総会をやることで総会への参加率を増やすために授業参観が行われている例がある。
- ・ 本庄学院は保護者会総会の出席率が高い。
- ・ 授業公開期間（1 週間、1 ヶ月位）を設けるという手はある。1 日 10 人限定で参観を許可する先生のみにしたらどうか。
- ・ 保護者の学校への満足度向上につながるのであれば授業参観はやってもいいのでは。
- ・ 保護者に ID カードを入れたストラップを 3 年間配付すると帰属意識も高まり、不審者を防ぐセキュリティにもなる。
- ・ 体育祭は公開したい気持ちはあるが、現状は難しい。
- ・ 本庄学院が公式戦の会場になってる部活はあるのか？
- ・ 高校生の体育祭は保護者は喜ぶので、開放できるのであればやったほうが良い
- ・ 本学の保護者の会は色々な点で理想的である。例えば、小中では保護者の IT リテラシーがバラバラで、紙媒体ベースの考えの人が委員になると活動に無駄が多くなり、IT リテラシーがある保護者のストレスが溜まる。本庄学院の保護者の能力は高い。

【地域の中で本庄学院はどうあるべきか】

- ・ 規模が小さい小学校は授業の融通をしやすいため、本庄学院生の出前授業への受け入れがしやすいが、規模の大きい学校はクラスの授業進行を合わせる都合上、授業の融通が難しく対応が難しいのが現状。毎週学院生が来てくれて子どもたちに授業をしてくれるのは、とても充実していてよかった。
- ・ 市民総合大学、河川研究班など地域活動をかなり活発にやっていると思う。
- ・ クリスマスマーケットなど市のイベントへ積極的な参加要請をしたいと思うが、やってもよいものか？先生方の仕事が増えること、日曜や夜の参加等障壁が多いように思う。
- ・ 本庄早稲田駅周辺のイベントであれば、梓寮生の参加を募集するというやり方もあるのではないか。
- ・ 新幹線通学の子は本庄の町の中に行くことがない、在来線でもバスでの本庄駅間の往復のみになってしまい、本庄市内との関わりがないまま卒業する生徒も多い。
- ・ 町に学院生がワイワイしているような状況を作りたい。
- ・ 環エネ研の先生が昨年までは街との接点を作ってくれていた。授業で本庄市との接点を作ることも重要である。

【その他】

- ・ 京都や新潟の私学の引率事故を受けて、これからも安全管理に最大限配慮することは大前提であるが、この事故により教育現場が委縮をするようなことがあってはいけないと思う。
- ・ 萎縮をしないというのはその通りだと思う。車を使うならバスを契約しろ・タクシーを使えというのは予算面から現実的に難しい。
- ・ 生徒引率のマニュアル整備は必要である。
- ・ 文科省大臣の指針により、修学旅行の団長（責任者）は校長と定められている。その意味でも校長は必ず同行しないといけない。本学は 2 コースではあるが、校長が 1 コース、もう 1 コースには別途団長を定めているのでその意味では問題ない。
- ・ 本学の修学旅行のプログラムは基本的に旅行社が手配しているので、その意味では学校側に全責任を負わされるという心配はない。
- ・ 事故があった際には真っ先に学校が対応するという姿勢が大事。海外の場合、特に食中毒、衛生管理、そして運転手の手配には注意が必要。
- ・ 修学旅行に海外に行くことについて保護者の意見を聞かせてほしい。物価高騰もあり現在の積み立てた金額では成り立たなくなっている。
- ・ 国内の修学旅行が良いという保護者の意見は聞いたことがない。また金額が高いという意

見もない。事前にきちんとした説明があれば値上げもありだと思ふ。修学旅行先を国内としたとき、本庄学院なのに国内なの？という生徒や保護者の意見は出るのではないか。

- ・ 修学旅行では引率の大変さなどもあり廃止論も出ている。
- ・ 本庄学院は大学のようなところがあり部活動に入らなくても楽しく充実しているということで帰宅部の生徒も多い。修学旅行のような学年ごとのイベントはあった方がよい。
- ・ 寮生活の魅力を打ち出すためには、ソフト面で訴える効果が大きいと思ふ。チューターなどの寮専属の職員を置くなど、寮生活がうまくいくようなソフト面の施策がほしい。
- ・ 寄付については、人工芝化などの明確な目的を示せば寄付率は上がるのではないかと思ふ。

12. 最後に

学校を構成する生徒・教職員・保護者にとって「良い学校」を作るためには、現状の良い点・悪い点を客観的に評価し、良い点を強化し、悪い点を謙虚に改めて行く姿勢が重要である。とはいえ、残念ながら、学校という社会は一般企業と異なり、なかなか客観的な評価をすることが難しい。それが学校にとって厳しい内容であればなおさらである。そのため、ともすると既存の在り方を継承して、なんとか事がなく過ごすことができてしまいがちである。

しかし、世界的にグローバル化が進み、教育内容や生徒・保護者の意識が多様化する中、それでは学校としては立ち行かなくなってしまう。学校の競争力が問われている。

ここに改めて、周囲の声に謙虚に耳を傾け、それが耳に痛い言葉であっても、より良い学校づくりに活かしたいと思ふ所存である。

ご多忙中にもかかわらず長い本文をお読みいただき、ご意見・アドバイスをいただいた外部評価委員の方々にこの場を借りて、学校を代表し心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。